はしがき

一、本書は、中等程度諸學校の高學年に於ける敎科用書として編纂せり。而して其分量は之を圖畫科敎授時間内に課する者として、約十時間を以て終ふるものと假定す。たゞし、適宜の取捨增減は、固より敎授者の隨意にして、その地方鄕土的畫談の如きに至りては、つとめて之を敷衍せられんことを望む。

二、美術史上の年代別、竝に繪畫の評語(例へば疎逸・勁拔など云へる類)の如きは、なるべく先人の用語を踏襲し、敢て、妄りに、私意を加へず。但し、生徒をして、常に美術史と通史との關係を忘れしめざらんことを要す。本書、章末每に、年表を挿入せるは、聊か、此缺點を補はんとの老婆心なり。

三、挿畫は、本書の骨髓とも看做すべき者なれば、なるべく、多數ならんことは、著者の希望する所なれども、印刷費に制限あるをいかにせん。又、その撰擇につきても、なるべく、代表的作品をとらんことは、固よりなれども、印畫の不鮮明なるは、遺憾ながら之を捨てたり。されば、敎授の際は、適宜の方法を以て、つとめて作例を示されんことを望む。

四、畫人逸話は、悉く信ず可からざるも、一種の興味を添ふる上に於て、多少益なきに非ず

と信ず。されば、本書鼇頭に於て、其二三の例を示せり。

五、本書編纂の方法につきては、尚、研究の餘地あるべし。著者、自から揣らず、本書を公にする所以は、たゞ、隗より始むるの意に外ならず。希くは大方博雅の是正を俟つ。

六、本書編纂に當りて、畏友、星野忠直（帝大、古典科出身）簗瀬由太郎（東京美術學校圖畫師範科出身）二君の、熱心なる指示助言に負ふ所多し。こゝに明記して、その厚意を謝す。

大正五年十一月　　著　者　誌

日本美術史教科書　目次

日本美術史教科書

原貫之助 著

第一章 飛鳥時代

推古天皇より文武天皇に至る十代百十四年間

佛教の傳來と繪畫の發達

我歷史に現はれたる最初の畫工

我國、上古草昧の世、未だ繪畫の記るすべき者あらず。只、わづかに、古墳の棺槨、又は土器などに、拙なき人畜・紋樣の形象を遺こすのみ。雄略天皇の朝、百濟より畫部(ヱカキベ)、因斯羅我(インシラガ)を貢し、又百濟の歸化人、辰貴の畫を善くすること、史に見ゆるも、固より其筆跡を徵するに由なし。降つて欽明天皇の朝、佛教百濟より渡來するに及びて、始て繪畫發達の曙光を見るに至りぬ。蓋し佛教の渡來は、やがて又、諸種工藝家の朝貢を促が

聖德太子
推古天皇二十九年薨去御壽四十九
推古天皇元年聖德太子四天王寺を建て同十五年法隆寺を建て給ふ
推古天皇十二年聖德太子畫師の世業を定めて戶課を免し給ふ

し、崇峻天皇の朝には、畫工白加(ハクカ)來り、推古天皇の朝には、百濟王子阿佐太子・高麗僧曇徵來りぬ。なかにも曇徵は、彩畫に巧にして、紙・墨・顏料の製法を傳へきと云へば、我繪畫に益する所多かりしや知るべし。而して本時代の中心人物として、最も佛敎の興隆、美術の振作に、力を盡くしたまひしは、實に聖德太子なりとす。

聖德太子　聖德太子は、用明天皇第一の皇子にして、御名を厩戶と申す。資性穎悟、博學多能にして、推古天皇元年、其皇太子と爲りたまひしより、萬機を攝し、又深く佛敎を信じ、佛像・寺院の建立と、繪畫の奬勵とにつとめられしかば、欽明天皇以來の佛敎は、之に於て、益、旺盛となり、繪畫並に其他、彫塑・建築等の技術も、亦蔚然として勃興せり。



御物聖德太子御影

Picture of 1300 years ago.

文武天皇大寶元年大寶令成る中に畫工司あり

飛鳥時代の遺作

飛鳥時代の技風

ついで、孝德天皇の朝、畫工狛堅部（コマノタチベ）子麻呂（コマロ）・鰤魚戸直（フナトノアタヘ）出づ、共に佛畫に工なり。是より先き、大化の革新あり。文物制度の、唐風を模倣したまふや、諸種の修飾の爲に、繪事は更に其盛を加へしが如し。又文武天皇大寶元年、朝廷、つひに、畫工司の官を設けられたるは、斯道の發達上、注目すべき事なり。

125 years ago



金堂壁畫藥師刹土圖
大和法隆寺藏

飛鳥時代の遺作として、玉蟲厨子繪・橘夫人厨子繪・天壽國曼陀羅・法隆寺金堂壁畫、竝に御物聖德太子御影などあり。聖德太子御影は、我國最古の繪畫たり。而

推古天皇十五年小野妹子を隋に遣はす　舒明天皇二年始て遣唐使を出す

奈良奠都と美術の隆盛

して此時代の技風は、概して、支那六朝の樣式と、西域印度の技風とを併せ、後に至りて、又稍、唐風を帶ぶるに至りぬ。想ふに支那印度の樣式を含めるは、其技術の、主として、是等流傳の媒介地たる、韓土の歸化人に依つて、なされたるが爲にして、又其唐風を帶びたるは、遣唐使など始まりて、唐との交通繁くなりたるを以て、自ら其影響を蒙りしなり。

第二章　奈良時代

元明天皇より光仁天皇に至る七代七十二年間

元明天皇、和銅三年、都を奈良に奠めたまひぬ。之より奈良朝七十餘年間、文華の盛は、燦然として、咲く花のにほふが如くなりき。歷代、行はれ來りし佛教は、聖武天皇、自ら三寶の奴と稱して、熱心に之を獎勵したまひしのみならず、光明皇后、

美術上に所謂天平時代

天平十三年諸國に國分寺を建つ

養老二年藥師寺移建

和銅三年興福寺造立

天平寶字三年唐招提寺建立

天平勝寶元年東大寺大佛成り同三年大佛殿建立

東大寺正倉院は聖武天皇御

亦之を助けたまひしかば、更に未前の隆盛を致し、優秀なる佛像・佛寺の造營せらるゝものの枚擧するに遑あらず。之に伴ひて、繪畫の面目を改めたること、亦前代に超えたり。

佛寺中、土功の偉大なるを擧ぐれば、東大寺・藥師寺・興福寺・唐招提寺等を以て最とす。而して是等の巨刹には、それ〳〵專屬の畫工を置き、專ら裝飾の用を辨ぜられたるが如し。又東大寺・大佛殿の建立に方りては、彩色畫師・堺畫師・木畫師・塗白土畫師・檢見畫師等、各、畫工の分業を定めて、從事せしめられきと云へり。其職事の盛況を察するにかたからず。

畫工司は、年と倶に其待遇を進められぬ、是等、佛畫・佛具の彩飾の外、宮廷に於ける器財・調度の修飾に、亦其用務の多かりけんは、夫の正倉院御物を以て、其一斑を窺ふに足るべし。

遺物を藏す寶器無慮三千餘點

顔料

奈良時代の遺作

當時の畫工司畫人の中、秦連稻村・簀秦麻呂・秦堅魚等の名あり。

繪畫の發達は、また顔料の供給と、密接の關係を有す。文武天皇の朝、始めて我國に産せし顔料は、爾來ますます其品目を增加し、聖武天皇の朝には、朱沙・丹・蘇芳・金青・綠青・金薄・銀薄等二十餘種を數ふるに至りぬ。



過去現在因果經の一部(釋尊竹林說法圖)
東京美術學校藏

奈良時代の遺作としては、**過去現在因果經**・**鳥毛立女屛風繪**・並に**吉祥天女圖**等あり。之を前代の遺作に較ぶれば、一般唐風の加はり

Picture of

700 —— 800

て、技巧大に進みぬ。中にも因果經、竝に鳥毛立女屏風繪の如きは、その樹石の描法に、後の倭繪の萠芽を認むるを得べし。



御物鳥毛立女屏風繪

衣及び樹葉に鳥毛貼附の
痕あり



吉祥天圖（大和藥師寺藏）

年表

時代	御宇	在位年數	年號	都
飛鳥	推古	36		大和國豐浦 同小墾田
	舒明	13		大和國飛鳥
	皇極	3	大化 白雉	同上
奈良	文武	11	大寶 慶雲	大和國藤原
	元明	7	和銅	大和國奈良
	元正	9	靈龜 養老	同上

飛鳥時代			
孝德	10		攝津國長柄
齋明	7		大和國飛鳥
天智	10		近江國滋賀
弘文	1	白鳳	同上
天武	14	朱鳥	大和國飛鳥
持統	10		大和國藤原
奈良時代			
聖武	25	神龜 天平	大和國奈良
孝謙	12	天平勝寶 天平寶字	同上
淳仁	4		同上
稱德	5	天平神護 神護景雲	同上
光仁	11	寶龜	同上

第三章　平安時代（桓武天皇より安德天皇に至る三十二代四百〇三年間）

桓武天皇の平安遷都は、奈良朝の文化を擧げて、こゝに移らしめぬ。爾來、藤原氏專權の時代を經て、平氏の滅亡に至るまで、凡そ四百餘年間、之を平安時代と稱す。今之を概括して三期に別かつ。

第一節　王朝期（桓武天皇より光孝天皇に至る九代百〇七年間）

密教竝に密教畫の傳來

最澄(傳教大師)天台宗をひろむ

空海(弘法大師)眞言宗をひろむ

大同元年空海唐より歸朝す

天安二年圓珍唐より歸朝す

大化革新以來の唐制模倣は、平安遷都を以て、其高潮に達しぬ。本期百餘年間、政治・宗教・文學・技藝・風俗、其他あらゆる方面に於て唐風の影響せる所少なからず。わけて宗教・藝術の上に於て、特筆せざるべからざるは、最澄・空海二師によつて傳來せられたる天台・眞言の密教と、又之れに隨つて、新たに起りし密教式の佛畫なりとす。

蓋し密教式佛畫は、其端を中唐に發せりと云ひ、顯教式佛畫と全然其趣を異にせり。もと印度婆羅門教の諸神を混じ、密教々儀の象徵として畫く者なるが故に、其圖像常に異樣にして、或は多面多臂を有ち、或は火焔につゝまれ、龍蛇を驅使し、或は忿怒の形相をなすなど、怖ろしげなるもの多し。而して是等は、空海・圓珍等の歸朝によつて、始めて唐より流傳

空海
承和二年寂
歳六十二

勤操大德
天長四年寂
歳七十

し來りぬ。

空海　空海は、世に名高き弘法大師なり。夙に入唐して、密法を慧果阿闍梨に受く。實に本朝眞言宗(東密)の祖にして、又密教式圖像の祖なり。大師、博學にして多才、教學の外、書畫・彫刻を能くし、製作する所、頗る多し。又能く木筆を用ふと云へり。大師唐に在るの日、唐人李眞をして、眞言七祖の圖像を畫かしむ。そのうち**龍猛菩薩**・**龍智菩薩**の二圖は、弘仁十二年、大師の自作に係る。こは密教畫にあらざれども、大師遺作中の最も優秀なる者とす。又大師の師**贈僧正勤操大德**の



勤操大德影
紀伊高野山普門院藏

781—887

圓珍 寛平三年寂 歳七十八

繪所の始め



降三世明王像
京都教王護國寺藏
本圖は藤原期の製作との說あれど密教畫の例としてこゝに揭ぐ

肖像あり。面貌姿態、寫生の妙を極む、蓋し大師の筆ならんと云ふ。

圓珍(智證大師)また圖畫に長じ、其遺作として**赤不動圖・黄不動圖**等あり。其他、眞言僧侶の畫技に長ずる者多く、屢、佛畫の製作せられたるは、史の誌るすところなり。されば本期の遺品としては、これ等の佛教畫最も多し。

前代に職事の盛を極めたりし畫工司は、平城天皇の大同三年、遂に廢せられて内匠寮に合併せられぬ。之より畫工司を繪所(エドコロ)と稱す。此頃より、殿閣の装飾一變して、屛風・障子など

百濟河成
仁壽三年歿歳七十二

河成曾て宮中に於て從者の面貌を畫きて之を撿せしめ又かつて飛驒内匠と其技を競ふ

巨勢派祖巨勢金岡

に、山水・花鳥・風俗をかくこと行はれ來れり。嵯峨天皇の弘仁中、紫宸殿の障子に、支那賢聖圖を畫かしめ、或は清涼殿の障子に、昆明池・荒海など、畫かしめられたるは、勿論唐畫の模倣ならんも、繪所畫人の筆なるべし。

百濟河成　この期、繪所以外より出で、著名なる畫家を百濟河成、とす。河成、其先は百濟の人なり。圖畫を善くするを以て屢々召されて、古人の像、山川・草木などを寫さしめらるるに、皆生けるが如くなりしと云ふ。蓋し寫生に長ぜし人たるを知るべし。

第二節　藤原期

（宇多天皇より近衛天皇に至る十八代二百六十八年間）

巨勢金岡　前期の末より、本期の初に亘りて、名高かき巨

金岡は水墨を以て十五層の山をかきわく

御府金岡の畫馬夜出で萩の戸の萩を嚼み

仁和寺の金岡繪馬は夜出でて近境の稻苗を食ふ

勢金岡出でき。金岡は清和天皇以後、五朝に歴仕し、官大納言に至り、仁和寛平頃を以て盛りとせし人なり。かつて清涼殿の障子に、弘仁以來詩を善くする鴻儒の圖像を書き、又紫宸殿の賢聖障子を畫きぬ。子公忠・公望・相覽・孫深江・弘高、皆畫を善くし、世々其業を襲ね、かねて又繪所の長者たり。

支那文明の杜絶と倭繪の勃興

寛平六年遣唐使を廢す

是より先き、推古天皇の御宇、始て隋唐の國交を修めたまひしよりこのかた、二百八十餘年、滔々として流れ來りし、かの地の文明は、前期來、其極に達せしが、宇多天皇、遣唐使の制を廢したまふに及びて、頓に衰頽するに至りぬ。而して支那文明の杜絶衰頽は、やがて、又我國風文化の開發を促がすの起因となり、宗教・文學・藝術等、まづ其影響を受けて一變し、折から當代の優美なる思想に砥礪せられて、こゝに所謂、一種

淨土教竝に淨土教畫の出現

源信　寛仁元年寂　歳七十六

の藤原式、和樣なる者を生ずるに至りぬ。乃ち巨勢派は、是等和樣繪畫、最初の代表者たり。蓋し和畫、即ち倭繪（ヤマトヱ）の眞の典型は、金岡以下父子繼承の間に次第に成熟せしならん。

宗教界、和樣化所產の一として、藤原氏の初に當りて、淨土教、竝に淨土教式佛畫出現せり。而して之は源信に依て主唱せられぬ。



聖衆來迎圖の一部（惠心僧都筆）
紀伊高野山巡寺八幡講藏

源信　源信は、惠心僧都として世に聞こゆ。大和國、葛城郡の人なり。比叡山の慈惠僧正に就て學び、專ら往生の願ふべきを唱へ、繪

截金彩色の始め

佛教の流行と佛畫の隆盛

畫に、彫刻に、阿彌陀及聖衆來迎の意を表はし、以て敎旨の鼓吹に勉めたり。故に世上に、其製作品と稱する者、甚だ多し。就中、紀州高野山の**聖衆來迎圖**、竝に京都禪林寺の**山越阿彌陀三尊像**など、其尤なる者とす。聖衆來迎圖は、規模の雄大にして、趣致の森嚴なる、宗教畫中、多く其比を見ず。蓋し惠心畢生の大作ならん。而して是等の淨土敎畫は、多くは截金(キリカネ)彩色になれり。之れ惠心の創意に係ると云ふ。敎學の外、繪畫・彫刻を藉りて。自己所言の鼓吹に努むる所、惠心僧都は弘法大師と相似たり。弘法大師を以て、密敎畫、唐風鼓吹の原動者とせば惠心僧都は、淨土敎畫・和様趣味の創意者と云ひて可ならん。

　是より先き、傳敎・弘法に依つて唱へられたる天台・眞言の二宗は、また本地垂跡の説によりて、神佛を混淆し、ひたすら

佛教は祈禱を事とし疾病變災にも亦之をなすに至る

天喜元年藤原賴通宇治平等院を建つ

繪佛師の始め

畫家僧位を受くる始め

佛教の國俗化に勉めしかば、惠心の淨土教と相俟ちて、しきりに朝野に行はれたり。されば、此ころ縉紳貴族にして佛堂寺院の建立を競ふ者あり、つひに朝廷の儀式にも、多く佛事を交へたまふに至れり。

佛教の隆盛、かくの如くなりしかば、隨つて佛畫の需要の頻繁にして、其製作の、いかに夥たゞしかりしかは、推して知らるべし。この頃佛畫專門の繪佛師てふ者出で來りぬ、この繪佛師始めて僧綱の補任を受け、畫家、僧位を受くるの新例を開きぬ。



普賢菩薩像(上半部)
東京帝室博物館藏
藤原時代の優美なる模範的佛畫

宅磨派　宅磨爲成鳳凰堂の扉を畫くに巨勢弘高と遲速を競ひ爲成は一日にして畫き終る

鳥羽覺猷　保延六年寂歳八十八

繪佛師の一に、春日繪所あり。**宅磨派**と云ふ。巨勢派以外に、別に佛畫の一派を樹つ。宇治平等院鳳凰堂の壁畫**釋迦八相圖**竝に**阿彌陀九品來迎圖**を畫きしは、卽ち斯派の畫家**爲成**の筆に係る。



戲畫の一部（鳥羽僧正筆）山城高山寺藏

覺猷　僧侶にして畫技に長ずる者源信の外、覺猷あり。覺猷は、世に鳥羽僧正と稱す。宇治大納言隆國の子なり。少にして覺圓大僧正に就て學び、鳥羽上皇の殊遇を受け、官大納言に進み、延暦寺の座主となる。僧正專ら倭畫を作り、人物を善くす。戲事を畫くに意を寫して形似を求めず。又

繪卷物の始

土佐派の始祖
藤原基光

藤原隆能
隆能の畫面貌の描法纖巧にして眉目鼻口只一線を劃するのみ故に其形に由て之を引目鈎鼻と云ふ

畫馬に妙を得たりと云ふ。其遺作として、**志貴山緣起繪卷**(二卷)**鳥獸戯畫**(三卷)等あり。筆致著想、奇警にして、其間自ら滑稽を寓す。後世滑稽畫を指して、鳥羽繪と云ふは、これに基く。

藤原基光　堀川天皇の御宇、畫家藤原基光出づ。基光は、藤原鎌足の遠裔にして、畫系、巨勢公望に出づと云へど、もとより詳かならず。後世、狩野派と相竝びて、倭畫の盟主たりし土佐派は實に基光を以て始祖とす。基光に次いで、近衛天皇の御宇、**藤原隆能**あり。春日の繪所に補せられ、春日を以て稱とす。但し基光と隆能とは其家を異にするを以て、世人或は隆能を以て土佐派の始祖に擬す。隆能は**源氏物語繪卷**の筆者として、其名顯はる。源氏物語繪卷は、今三卷を存す。名高かきは紫式部の源氏物語を畫きし者にして、其筆致、婉美を極めた

玩賞的繪畫の發達

歌繪葦手繪等の文様畫起ろ



源氏物語繪卷柏木の一段(藤原隆能筆)
侯爵德川義親氏藏

り。蓋し藤原氏華奢文弱の反映を寫せる者ならん。

藤原氏、前後百四十餘年間、其富貴榮華は、また日常玩賞的繪畫の發達を促がしぬ。蓋し此時代はオ媛頻々として輩出し、或は文學に長じ、或は繪畫に巧なる者多かりしかば、是等女性的趣味に因つて發案せられたる者も亦多かるべく、屏風繪・扇繪其他さま〲の玩賞的作品出で來りぬ。

第三節　平家期

（後白河天皇より安德天皇に至る五代二十八年間）

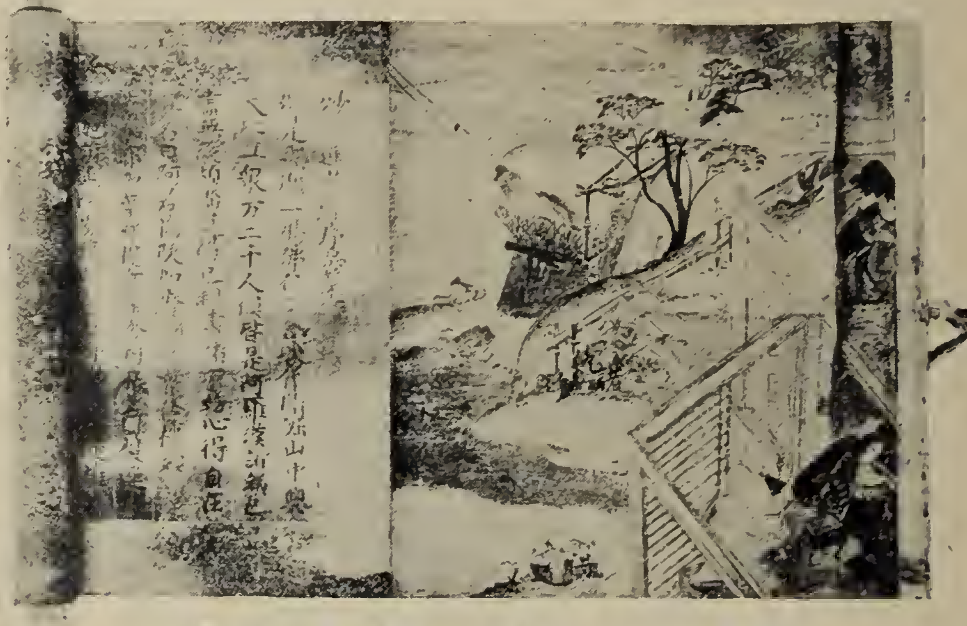
保元平治の亂後、平家一門の、一たび廟堂に榮ゆるに至るや、また、藤原紈袴子の舊套を學びて、專ら文雅に耽り、鳥羽法皇、又容儀を重んじ給ひしかば、是等の弊習は。一層世風の文弱を來し、前期と毫も撰む所なきに至れり。されば隆能一派の所謂引目鉤鼻、眠むるが如き女性的畫風は、依然として一般に喜ばれぬ。

寫經の流行

此頃、繪卷物の外、繪畫、又は文樣を以て、寫經を裝飾すること、しきりに行はれたり。或は女流畫家の手すさびに出づる者あらん。寫經の遺作としては、平家納經卷を以て、其尤も出色なる者とす。

嚴島神社平家納經卷

嚴島神社平家納經卷　嚴島神社納經卷は、平氏一門の書寫し、奉納せる者にして、法華經二十八卷、無量壽經其他四卷



嚴島經卷口繪（安藝嚴島神社藏）

併せて三十二巻あり。毎巻見返しに、隆能風の繪を有す。書畫共に金・銀・紺青・緑青等を用ひて装飾す。もとより絢爛の美古來の經卷中になき所なり。啻に其繪畫文緣の優秀なるのみならず。其卷軸・外題・紐露等、製作の妙



伴大納言繪詞應天門火災の段（藤原光長筆）伯爵酒井忠道氏藏

土佐派
藤原光長

は亦能く工藝界百代の模範たるべし。

土佐派は、本期の初にあたりて、古土佐の巨擘、**藤原光長**出でぬ。光長、其父祖の傳歷を詳にせず。或は藤原隆親の男ともいへり。其遺作、**伴大納言繪詞**(三卷)**病草子繪卷**(一卷)**年中行事繪**(舊六十卷)**粉川寺緣起**(一卷)等あり。年中行事は後白河院の勅により畫きし者にして、六十卷ありきと云へど、今は若干の模本を殘すのみ。伴大納言繪詞は、貞觀八年伴善男の應天門を燒きし事蹟を畫きし者なり。光長の筆は勁峻にして隆能とやゝ其趣を異にし、其技風は、寧ろ鎌倉時代に屬せり。

年表

時代	御字	在位年數	年號	執政者
	桓武	26	天應 延曆 大同	
	後冷泉	23	永承 天喜 康平 治曆	藤原賴通

期	天皇	年数	年号	
王朝期	平城	3		
	嵯峨	14	弘仁	
	淳和	10	天長	
	仁明	17	承和 嘉祥	
	文德	8	仁壽 齊衡 天安	
	清和	18	貞觀	藤原良房
	陽成	8	元慶	藤原基經
	光孝	3	仁和	
藤	宇多	10	寛平	
	醍醐	33	昌泰 延喜 延長	
	朱雀	16	承平 天慶	藤原忠平
	村上	21	天曆 天德 應和 康保	

期	天皇	年数	年号
藤原期	後三條	4	延久
	白河	14	承保 承曆 永保 應德
	堀河	21	寛治 嘉保 永長 承德 康和 長治 嘉承
	鳥羽	16	天仁 天永 永久 元永 保安
	崇德	18	天治 大治 天承 長承 保延 永治
	近衛	14	康治 天養 久安 仁平 久壽

第四章　鎌倉時代

後鳥羽天皇より後醍醐天皇に至る十五代百五十五年間

原期

冷泉	圓融	花山	一條	三條	後一條	後朱雀
2	15	2	25	5	20	9
安和	天祿 天延 貞元 天元 永觀	寛和	永延 永祚 延暦 長徳 長保 寛弘	長和	寛仁 治安 萬壽 長元	長暦 長久 寛徳

藤原實頼	同伊尹	同兼通	同頼忠	同兼家	同道隆	同道兼	同道長	同頼道

平家期

後白河	二條	六條	高倉	安德
3	7	3	12	3
保元	平治 永暦 應保 長寛 永萬	仁安	嘉應 承安 安元 治承	養和 壽永
		平清盛		

平氏亡び、源氏興り、源頼朝、覇府を鎌倉にひらき、政權を掌握せしより、北條氏之を承けて、爾來百五十餘年、武家政治の結果として、武斷簡率の氣風、一世に瀰漫せしかば、世相、著しく前代と相反し、人の、また月に吟じ、花に眠むる底の柔弱なる繪畫を、喜ばざるに至りぬ。之に於てか、從來の文學的畫材は、一變して、事實の說明的題材となり、主として社寺に關する事蹟、高僧の傳記或は戰亂、事變等を喜んで描寫するに至れり。而して是等は皆繪卷物として製作せるが故に、本時代に於ける繪卷物の盛は、實に前後に其比を見ず。つひに十卷、二十卷等の大作を出だし、其浩瀚なる者の如きは、四十餘卷にわたれり。而して其筆者の、概ね土佐派畫家なるが故に、本時代は、又土佐派全盛期と謂つべし。

土佐派				
藤原經隆 寛元頃 經隆以後の土佐派に對し其以前を古土佐と稱す卽ち春日派之れなり	土佐邦隆 文永頃	土佐長隆 永仁頃	土佐吉光 正安頃	

藤原基光に起りし土佐派は、世々、春日を以て稱とせしが、**藤原經隆**の、土佐權守に任ぜられたるより、春日を改めて、土佐と稱す。乃ち土佐派の名稱、こゝに起りぬ。經隆に**西行物語**(二卷)**御物、百鬼夜行圖**(一卷)の作あり。



法然上人行狀繪圖第二卷の一部(土佐邦隆筆)
京都知恩院藏

經隆の子に**邦隆**あり。邦隆の弟に、**長隆**あり。長隆、**御物蒙古襲來繪詞**(二卷子長章との合作)**土蜘蛛草紙**(一卷)竝に**住吉物語**等を畫く。蒙古襲來繪詞は、永仁元年、肥後の人、竹崎季長の蒙古擊攘の戰功を子孫に遺さんとて長隆父子をして畫かしめし者と云ふ。**土佐吉光**は、**法然上人行狀繪圖**(四

藤原信實　文永二年卒　歳八十九

法眼淨賀　延文元年寂　年八十二

住吉慶恩　建仁頃

法眼圓伊　正安頃

十八巻、圓光大師一代の畫傳にして、世に勅修御傳と稱す)**法然上人繪傳**(二巻、法然上人行狀繪圖に同じ)**一遍上人繪詞傳**(十巻、時宗開祖一遍上人、布教の事蹟を畫く)等を畫く。但し法然上人行狀繪圖は、吉光の外、邦隆・行光・長章等數人の合作に係かる。

土佐家、以外の土佐派畫家にして、大家少からず、**藤原信實**は、肖像畫の巨擘、**藤原隆信**の子にして、和歌に巧に、又圖畫に長ず。其遺作に、**北野天神緣起**(八巻、菅公一代の事蹟を畫ける者にして、根本緣起と稱せらる)**紫式部日記繪**(三巻)等あり。

法眼淨賀は、信州、康樂寺の僧なり。**親鸞上人傳繪**を畫く。住吉慶恩は、攝州、住吉の繪所と云へど、詳ならず。其遺作**平治物語**(二巻)**當麻曼荼羅緣起**(二巻)あり。**法眼圓伊**は、**一遍聖繪**(ヒジリヱ)(十二

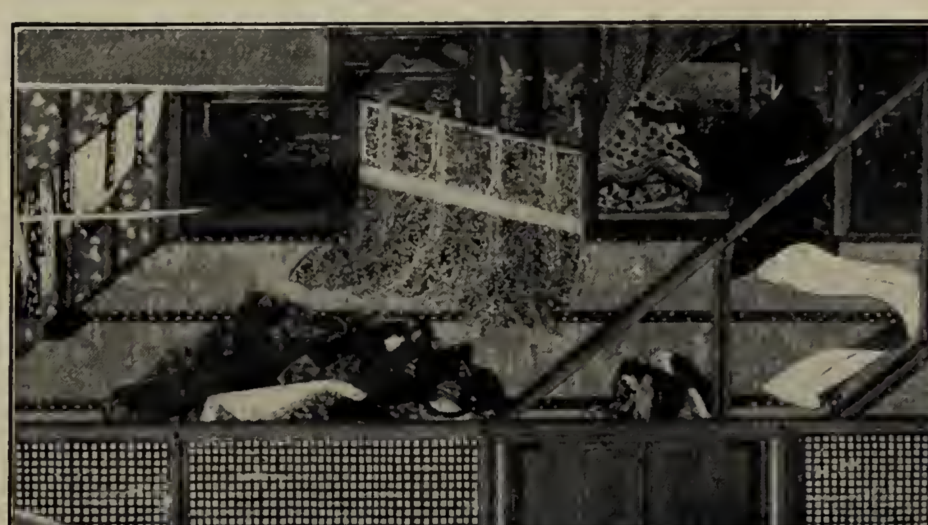
1184 —— 1338



藤原信實肖像



北野天神緣起繪卷
恩賜の御衣の段
（藤原信實筆）
京都北野神社藏



御物春日明神驗記
春日明神齋宮女御
の夢の枕に立たせ
らるゝ段
（高階隆兼筆）



一遍聖繪第一卷の一部（法眼圓伊筆）
京都六條歡喜光寺藏

高階隆兼
延慶頃

卷、一遍上人繪詞傳に同じ)を畫けり。**高階隆兼**は、春日、又土佐と稱す。繪所預に補せらる。春日隆親の男とも云へど、詳ならず。其作、**御物、春日明神驗記**(二十卷、奈良春日明神の、靈驗顯著なりし事蹟を畫く)は、隆兼畢生の大作たり。隆兼、又**石山緣起**(七卷中の三卷)の一部を畫く。

以上は、皆當代の巨匠にして、其作品は、とり〴〵に特色を有す。平治物語の悽愴なる、北野天神緣起・春日明神驗記等の壯麗なる、一遍上人繪詞傳、或は一遍聖繪等の、鎌倉時代の風俗と、背景山水の妙とを盡せる、其非凡の手腕は、後世また、かくの如き者あるを見ず。

似繪(肖像畫)の發達

平安朝の頃、百濟河成が、從者の面貌を畫き、弘法大師が、眞言祖師の影像を畫きしが如き、一種の肖像畫ありしかど、未

藤原隆信
元久元年卒
歳六十四

だ専門的に、斯道に長ぜる者あらざりき。本時代に及びて、**藤原隆信**父子輩出して、大に斯道の長技を發揮せり。隆信は藤原爲隆の子にして、左京太夫に任ぜらる。和歌を善くし、能く寫眞に長ず。其遺作、**平重盛・源頼朝・藤原光能**等の肖像は著名なり。女、右京太夫、また畫をよくす。男、**信實**は、北野天神縁起の筆者にして、また寫眞家の譽を馳す。曾て順德院の御時、清涼殿に於て、御歌會ありしを、信實之を圖するに、一々列席群臣



後白河法皇御影
藤原隆信筆
山城高雄神護寺藏



源頼朝肖像
藤原隆信筆
山城高雄神護寺藏

動物畫

藤原良經 建永元年薨 歲三十八

藤原基通 天福元年薨 歲七十四

佛教畫の變遷と禪宗の傳來

安元元年源空淨土宗を開く

元仁元年親鸞淨土眞宗を開く

の生を寫せり。又承久三年、堀河天皇御落飾の御時、召されて其御影を寫し奉りきと云へり。遺作**三十六歌仙圖**は、同圖中の模範たり。信實、子**爲繼**、孫**伊信・爲信**あり。各々箕裘を紹ぎて、肖像畫に長ず。

本時代、牛馬の畫を作る者出で來たりぬ。尚武の反映ならん。中にも**藤原良經**(後京極攝政)は、馬を畫き、**藤原基通**(普賢寺攝政)は、好んで牛を畫く。時人、其妙に服して、普賢寺殿の牛、後京極殿の馬と併稱せりと云ふ。

佛畫は、本時代に及びて著しく遷變せり。天台・眞言二宗の說く所、高遠に馳せて、俗耳に入り難く、しかも漸く、其弊を生ぜしかば、此間に在つて、修行容易の新宗教の起るは、蓋し自然の勢なり。此傾向は、曩に惠心僧都に由て、其端を發せしが、

建久二年榮西歸朝す（建仁寺開山）
安貞元年道元歸朝す（永平寺開山）
弘安二年祖元來化（圓覺寺開山）
寛元四年道隆來化（建長寺開山）

次いで淨土宗(源空)淨土眞宗(親鸞)の興起となりて、其流布益々盛なりしかば、随つて、佛畫も自ら變化せざるを得ず。されば、前代に盛なりし密教畫は淨土教畫に其地位を占められて、つひに顯密兩畫の渾化を來たしぬ。かくて禪宗の傳來は、更に又此畫に一轉化を與へ、其命題意義、共に改まりて、また禮拜的佛畫を見るを得ざるに至れり。

禪宗は鎌倉幕府の初、榮西・道元に由つて、率先傳へられたり。其後禪僧の彼地より來化し、又我より請益する者、頗る多かりしが、しかも是等の影響は、啻に佛畫に一轉化を來さしめたるのみならず、其禪僧の戲墨は、端なくも東山時代水墨畫の起源をなしき。

禪僧の將來品などに、感化せられたるにや、宋朝の畫風、い

宅磨勝賀
建久頃
宅磨榮賀
正平頃

つしか我佛畫に混じ、其筆法に著しき特色を有する者あり。之を宅磨派とす。勝賀・榮賀の二人尤も著はる。但し平安朝の宅磨派中の人なるや否やを知らず。

年表

時代	御字	在位年數	年號
鎌	後鳥羽	15	元暦 文治 建久
	土御門	12	正治 建仁 元久 建永 承元
	順德	10	建暦 建保 承久
	仲恭	1	
	後堀河	11	貞應 元仁 嘉祿 安貞 寛喜 貞永

時代	執政者
鎌	（空欄） 源頼朝 源頼家 源實朝 平政子 北條義時

時代	御字	在位年數	年號	執政者
時	龜山	21	文德 弘長 文永 建治 弘安	北條時宗
	後宇多	7		北條貞時
	伏見	11	正應 永仁	
	後伏見	3	正安	

天皇	四條	後嵯峨	後深草	
年數	10	4	13	
年號	天福 文暦 嘉禎 暦仁 延應 仁治	寛元	寶治 建長 康元 正嘉 正元	
執權	北條泰時	北條經時	北條時頼	

天皇	後二條	花園	後醍醐	
年數	7	10	20	
年號	乾元 嘉元 徳治 延慶	應長 正和 文保	元應 元亨 正中 嘉暦 元徳 元弘 建武 延元	
執權	北條師時	北條貞時	北條高時	

（倉 … 代）

第五章　東山時代（後村上天皇より正親町天皇元慶三年に至る九代二百三十四年間）

在來の佛教畫は、京都・奈良地方の社寺繪所、巨勢・粟田口・春日などの畫人、之を製作し、なほ餘喘を保ちたりけんも、大勢は既に轉じて其精神を失ひぬ。而して之に代はれる禪宗式佛畫は、主として道釋・人物、例へば釋迦・文殊・達磨・布袋などの

1339——1572

明兆

永享三年寂歲八十三

明兆老母淡路に在りて病に臥す一たび兆を見んと欲す時に兆五百羅漢を畫く爲に自己の肖像を畫き之を送りて母の心を慰めきと云ふ

禪宗の興隆と宋元漢畫の勃興

如きを以て題材とし、其目的の必ずしも禮拜的にあらざるが故に、鑑賞的繪畫との區別、殆んどなきに至れり。

明兆　禪宗式佛畫の代表的大家を、明兆とす。明兆は淡路の人にして、吉山と號す。東福寺に入りて僧となり、應永中、その殿司となる。仍りて兆殿司と稱す。其作る所巨幅多く、曾て相國寺の法堂天井に、十餘丈の大龍を畫き、又東福寺に於て涅槃の巨圖を作る。明兆の畫は李龍眠・顏輝の法格を學び、其宋元佛畫を大成せるの妙技は、本朝第一と稱せらる。



五百阿羅漢畫像五十幅中の一
（明兆筆）京都東福寺藏

禪宗は、直指頓悟を旨

京都及鎌倉の五山十刹南禪寺大德寺等しきりに建立せらる

道元、道隆、祖元、子曇、一山皆畫を善くす

とし、簡捷靈活、自ら思惟學修に乏しき、當時武辨の氣風に相投ぜしかば、本時代に及びて、其宗化益〻揚がり、足利歴代の將軍を首として、其他、武人の之れに歸依するもの甚だ多かりき。しかも、碩學・高僧、多く禪門に出で、當時の文化は是等の人人によりて支配せらるゝの觀ありしかば、禪宗の流行は、やがて又武人の思想好尙を一變せしめ、ひいて繪畫の一大革新を來たすに至りぬ。

繪畫の一大革新とは、何ぞや。繪畫に對する一般の嗜好の、自ら灑洒・清淡の者に向ひしこと、之れなり。蓋し之れ前代の始め、來化せる禪僧の、法悅の餘技として、戲墨を試みしに淵源し、ついで舶載支那畫に刺戟せられ、又前述の如く禪宗的趣味の高潮せる結果にして、かくて巨勢・土佐など、倭繪の纖

君臺觀左右帳記に誌されたる當時の支那畫家百五十六人に上る

文明十一年相阿彌足利義政の唐物奉行となる

穠艶麗なる畫風は漸く省みられざるに至れり。

繪畫が其外形に於て、灑洒・清淡に向ひ、水墨・草略を尙びしと共に、又其著想に於て、靜寂・恬淡となり、また其題材に於て、過去の拘束を脫して、自由に、且つ廣く、山水・花鳥・風月等、自然界の描寫を以て、喜ぶに至りしかば、在來の一種の實用的意義になれる繪畫は、更まりて純然たる美術的賞鑑畫の出現となりぬ。

弘安の役後、中絕せし外國との修交は、足利氏、明との交通に因て復舊し、又僧侶・商估の、私に渡航して、彼地の文物を輸入し、美術品を齎らしゝかば、當時繪畫の流傳せること、非常に夥たゞし。加ふるに足利義滿・義政等、華奢風流を極めければ、建築・造庭・茶道・聞香・挿花等の諸技と相俟つて、畫幅の賞鑑

1339—1572

支那畫は當時社交上の贈答品として盛んに用ゐられ將軍家への獻上品又將軍家よりの拜領品等重に支那畫を用ひたり
畫に印識畫贊をなすこと流行す

如拙　應永頃

周文　永應頃

裝潢・粧飾等の方式をも生じぬ。而して是等の方式は、遂に現代に於ける繪畫賞鑑法の儀範となれり。

禪宗的趣味に胚胎し、足利將軍家の好事に扶掖せられ、支那船載畫に刺戟せられたる宗元漢畫は、應永以後に勃興して文明前後を以て其盛時に達せり。而して禪僧戲墨に一轉化を與へて、行家の技となしゝは、京都相國寺の僧**如拙**なりとす。如拙南宋院體の馬遠・夏珪・牧溪、或は元の顏輝を學びて、宋元の風格を得たり。同じく、相國寺の僧にして、**周文**あり。彫刻を善く



三益齋圖(周文筆)
男爵岩崎小彌太氏藏
By Sanekisai

小栗宗丹
應仁頃

中尾眞能
文安文明
中尾眞藝
長祿文明
中尾眞相
文明永正
床飾の儀範と
なれる君臺觀
左右帳記竝に
御飾記は眞能

し、また畫技に秀づ。如拙を師として出藍の譽あり、宋元諸家の蘊奧を極む。雲谷・狩野の諸家をして、宋元の堂奧に上るを得しめ、以て東山時代の斯藝を大成したるは、畢竟周文の力なり。

周文の門に、**小栗宗丹**あり。足利義政に仕へ、特に山水に長ず。周文より潤にして、雪舟より柔なりと稱せらる。狩野派の祖、正信は、實に宗丹より出づ。



達磨像(曾我蛇足筆)
左右德山臨濟三幅對
京都大德寺養德院藏

周文門下として、又**中尾眞能**(能阿彌)**眞藝**(藝阿彌、眞能の子)**眞相**(相阿彌、眞藝の子)あり。倶に書畫

眞相二人の著なり

此時の南畫を後の明清南畫に對して古南畫と云ふ

曾我蛇足 文明十五年歿

啓書記 文明大永

を能くし、和歌に巧なり。牧溪を慕へりと云へど、其遺作寧ろ南畫に近し。

眞能・眞藝・眞相、又古畫器物の鑑識に通じ、茶事造庭に精はしかりしかば、父祖、相次で斯藝を以て足利義政に仕ふ。

もと明の歸化人と稱する、曾我秀文の子に、**曾我蛇足**あり。父に學びて、道釋・人物及山水・花鳥を善くす。畫系は、固より宋元、李龍眠・顏輝に出でたり。蛇足を祖述する一派を曾我派と云ふ。

鎌倉に於て別に宋元風の一家を起せるを、**啓書記**とす。啓書記、名は祥啓と云ひ、相模の人なり、(或は野州の人と云ふ)建長寺の書記たるを以て、啓書記と稱す。畫系周文に出て、道釋・人物・花鳥・山水に長ず。文明十年、京洛に上りて、藝阿彌を訪ひ、



夏景山水圖(僧雪舟筆)京都曼壽院藏

By
Seshu.

雪舟　永正三年寂壽八十七赤濱は今の都宇郡三須村なり

雪舟幼時僧となり經卷を事とせず一朝師僧怒りて雪舟を堂柱に縛す雪舟脚の大拇指を以て淚を點じて鼠を堂板に畫く勢恰も活鼠奔走の體に似たりと

相府所藏の古名畫を見、之を模するを得て、爾來技大に進みきと云ふ。

雪舟　宋元の畫風より出でゝ、別に一格を爲し、曠古の畫聖として百代の具瞻を恣にするを、僧雪舟とす。雪舟、名は等揚と云ひ、備中赤濱の人なり。少にして僧となり、壯歲、相國寺に入り、周文に就て畫を學ぶ。應仁元年、入明して四明天童の第一座となる。雪舟明に在るや、能



雪舟肖像

畫を求めて師となさんとせしに、意に適する者なかりしかば、明國自然の山川草木を以て、我師とし激勵怠らず、其技大に進むを得たりと云ふ。蓋し雪舟の筆は、老勁蒼雅、宋元の精粹を盡し、しかも其妙處に至りては之を天性に得たり。尤も

雪舟筑前蘆屋釜の圖案を作る

雪村は磐城の人なり故に雪村の畫風東北地方に多し、

狩野派祖狩野正信
延德二年歿歳三十七

山水に長じ、人物花鳥之に次ぐ、曾て山水畫卷を作るに、全長五丈餘、或は層巒疊嶂の趣を畫き、或は平遠萬里の樣を寫し、縱橫に揮灑し去りて景象の變化盡くる所を知らず。眞に天來の妙技を發揮せり。雪舟、また能く減筆畫に巧なり。人物・牛馬、よく一筆を以て形をなす。此法、蓋し雪舟の創意になると云ふ。



虎圖(雪村筆)東京美術學校藏

By Sesson

雪舟門人多く又其技風を慕ふ者多し。中に**等觀秋月・拙宗等揚・雪村等**あり。雪村尤も秡群の譽あり。

狩野正信　宋元漢畫より出でゝ、我國の一大畫派となれるを狩野派

狩野元信
永祿二年歿
歳八十四

とす。狩野派の始祖を、狩野正信と云ふ。其先は藤原氏に出で、世々、伊豆國狩野村に居るを以て氏とす。足利義政に仕へて、其近侍たり。畫は如雪・周文を主とし、又小栗宗湛の教を受く。されども正信早世しければ、眞に狩野派の法格は子、元信に於て大成せり。

狩野元信　元信は、正信の長子にして、所謂古法眼元信之れなり。足利義澄に仕へて近侍たり。元信、小栗宗湛を師とし、學ぶこと父に過ぐ。其畫を作ること、溫良にして細密、滋潤にして清秀、山水・人物・鳥獸・花木倶に妙處を窮む。曾て其畫を明國に送りしに、日本五百年來かつてなき所の品なりとて、明人大に驚きしと云ふ。抑、正信、夙に狩野の家風を創始せりと雖も、中頃にして病歿し、未だ大成するに至らざりしかば、元

元信金工家後藤友乘の爲に彫刻の圖案を作る

元信の妻は當時土佐派の名手光信の女なり故に土佐派と狩野派とは血族に於て混じ又畫派に於て相混淆せり

巨勢土佐派の衰微と繪卷物の泯滅

信其箕裘を紹ぎ、天稟の偉才は、能く前人の長所を攅めて之を渾融し、以て狩野派の法格を完成せり。

元信、又繪卷物にも長じ、其遺作**栴檀瑞像緣起**(五卷)**酒顚童子畫卷**(三卷)等あり。蓋し元信は土佐派を研究し其著色法を取つて、之を漢畫に施すことを工夫し、以て一種倭漢混淆の折衷體を始めたり。元信より子孫代々相傳へて德川三百年間畫院の主權を握れり。



携琴訪友圖（狩野元信筆）
京都妙心寺塔頭靈雲院藏

巨勢派は平安朝このかた、重に佛畫家として續きたりしが、本時代、**飛彈守惟久・巨勢行忠**等出でゝ、繪卷物を畫けり。惟

飛彈勢守惟久
貞和頃

土佐光信
大永五年歿
歳九十二

久の遺作に、**八幡太郎繪詞**(三卷、又後三年合戰繪詞と云ふ、後三年の役、源義家の武功を畫く)**破來頓等繪卷**(一卷)あり。行忠の遺作に、**弘法大師行狀記**(十二卷)あり。而して行忠以後、巨勢派は、また振はず。

土佐家は、吉光ののち、七代を經て、土佐光信を出だし、畫名一代に高かゝりしかど、其孫光元の永祿十二年、三好長慶の亂に戰死してより、遂に畫系血族倶に亡びぬ。

土佐光信　光信は、土佐廣周の嗣なり。右近將監に任じ、繪所預に補せらる。畫法を父に問ひ、深く古土佐の筆蹟を究め、別に一格を出せり。尤も金碧の彩畫に長ず。其遺作の重なるものは**天神緣起**(三卷、文龜三年成れるを以て、藤原信實筆根本緣起に對して、文龜本と稱す)**清水寺緣起**(三卷)京都**禪林寺融**

誓願寺縁起聖德太子繪傳は繪卷物にあらず掛幅なり之れ繪卷物の形式を變化せし始なり

通念佛緣起(二卷)等あり。

奈良・春日の繪所藤原行秀(土佐光顯の孫、光行の子とも云ふ)同じく春日繪所、粟田口隆光(或は土佐光顯の子とも云ふ)土佐行光(光顯の子)等の合作になりしと云ふ、山城淸凉寺の融通念佛緣起(三卷)、聖應大師良忍の、融通念佛勸進の事蹟を畫けるもの)は、秀秡の作として、本時代繪卷中の白眉たり。

此時代繪卷物として、土佐家、又は土佐派畫家の遺作頗る多し。福富草紙(二卷)佛鬼軍繪卷(一卷)なよ竹物語(一卷)直幹申(ナホモトマウシ)文(フミ)繪詞(一卷)誓願寺緣起(二幅)御物聖德太子繪傳(四幅)等、一々擧ぐべからず。しかれども、畫品次第に低下し來りて、また昔日の如くならず。しかも宋元新興畫は、勢力を得來りぬ、土佐家の頽勢は如何とも詮すべなかりけん。繪卷物は、御伽草紙

肖像畫

聖一國師　東福寺開山　弘安三年寂　歳七十九

殿閣の築造と裝飾畫

天正十五年聚落第成る

文祿二年伏見桃山城成る

に姿をかえて、終に亡び畢りぬ、たゞ此際土佐派後勁の地位を固守したるは土佐光信なりき。

前代の餘風を受けて、肖像畫また極めて多し。天皇御影・武將・禪僧(禪僧の肖像畫を頂相(チンサウ)と云ふ)などの肖像あり。中にも**聖一國師頂相**(明兆筆)金澤文庫の創立者**金澤貞顯像・後醍醐天皇御影・足利義持壽像**等、傑出せる者とす。但し其筆者を知らず。

第六章　桃山時代

正親町天皇天正元年より後陽成天皇慶長七年に至る二代三十年間

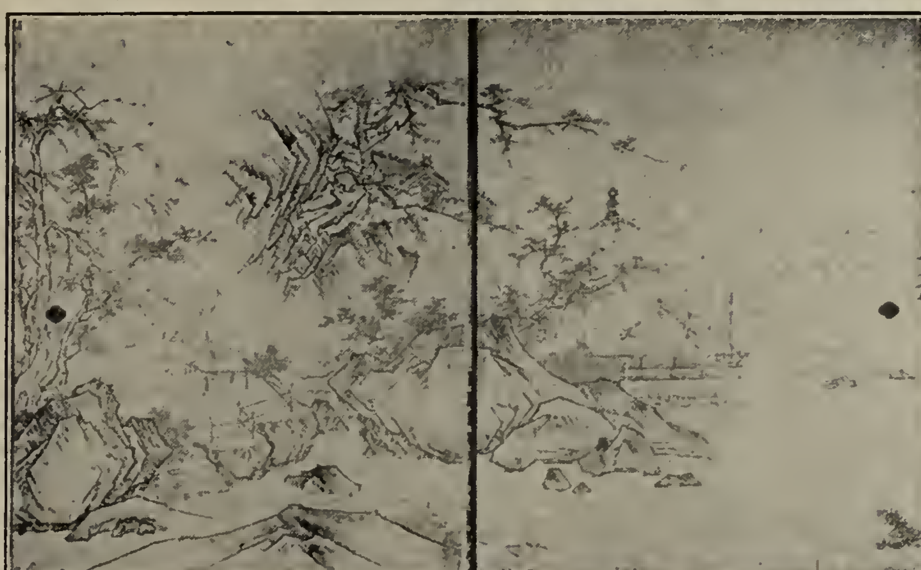
不世出の英雄豐臣秀吉の、一たび其志を得るや、豪華を一代に極め、大土木を起して、聚落・桃山・大阪等の城第を營み、書院造建築の形制を一變して、之れに飾るに金壁・金障・絢爛陸

天正十二年大坂城成る

秀吉又戲墨を試む草々意を經ずと雖も雄拔の氣象を見るに足ると云ふ

狩野永德　天正十八年歿年四十八

離の美を以てせり、隨つて、其他寺院・諸侯・大夫の邸舍等、亦續々建築せられ、皆金壁を以て飾られたり。爲に繪畫の面目を一變し、前代未だ見ざるの壯觀を呈せり。而して此時代に適應し、能く秀吉の意を受けて、其志をなし、豪華を形彩に現はしたるは狩野永德なりき。



琴棋書畫圖障子繪(狩野永德筆)
京都聚光院藏

狩野永德　永德は、元信の孫にして、狩野氏五代の人なり。敎を祖父元信に受く。始め織田信長に仕へ、安土城の天主閣に畫きて、其名あらはる。織田氏亡びて後、豐臣秀吉に仕ふ、大阪・桃山・聚落等殿舍の障壁に、彩筆を

狩野山樂 寛永十一年卒年七十七

海北友松 元和元年卒八十三

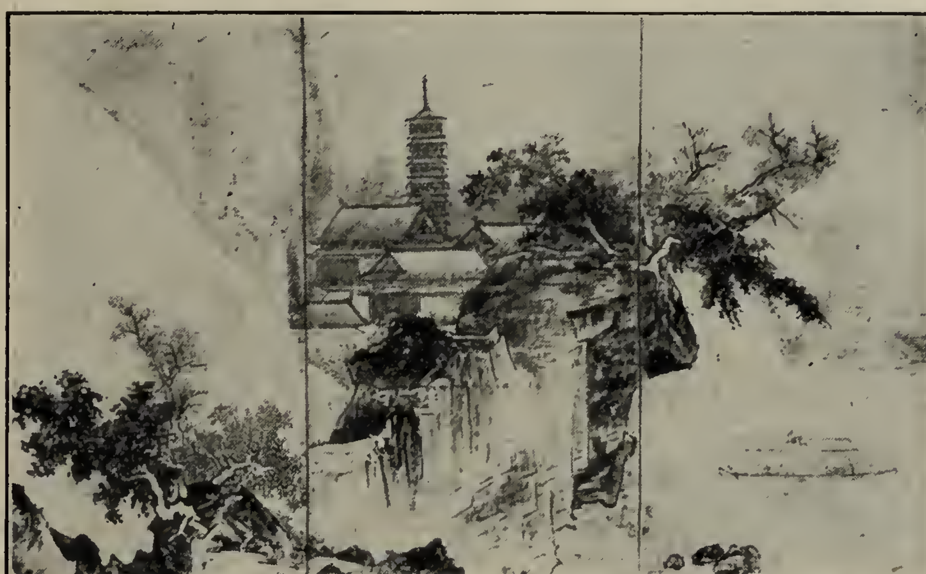
揮ひ、金碧燦爛たる大畫を作りき。その大規模なるは、畫中の松・梅、長さ十丈、二十丈に達し、人物の高さ、三四尺に及ぶ。又藁筆を用ひて畫く。其勢、奔騰龍蛇の如く、圖樣斬新にして、前輩不傳の妙を得たりと稱せらる。古來宗教畫の壯嚴なる者を除きては、またかくの如き金壁畫あるを見ず。

門人**山樂・友松**あり。共に近江の人なり、山樂名は光賴と云ふ。秀吉の命に由て、永德の門に入り、狩野氏を冐す。好んで動物畫を作り、鷹の圖は其尤も得意とする所なり。又時樣の風俗畫を畫く。之れぞも〳〵後世浮世繪の發端なり。友松は、また畫法を永德に學び、曾て朝鮮に渡る。宋の梁階の風を慕ひ、減筆を以て人物を畫く。其褶襞少なきを以て、世に之を袋畫と云ふ。

雲谷派祖
雲谷等顏
長谷川派祖
長谷川等伯
慶長十五年
歿歳七十二

本時代は、狩野の畫風、天下を風靡し、其盛名畫壇を壓し、金碧の濃彩燦爛たるを喜びしも、又其半面には、茶道の流行と相副ひて、しきりに淡墨畫行はれたり。

雲谷等顏・長谷川等伯　雪舟の畫風を趁ひ、之を祖述する者に、雲谷等顏と、長谷川等伯とあり。等顏は、肥前の人にして、毛利家に仕ふ。始め狩野松榮に就て學び、後、雪舟の山水畫卷に因て其眞髓を得たり。雪舟の畫風に、大に寫生を加へたる技倆は、本時代山水畫中の白眉たり。此派を紹述するを雲谷派と云ふ。



四季山水屛風の一部(雲谷等顏筆)
東京木村長七氏藏

長谷川等伯に等伯畫說の著あり

曾我直庵土岐洞文天正十年歿歲八十一

等伯は、越前の人なり。また松榮に就て學び、後、雪舟の畫を慕ひ、自ら雪舟の後と稱す。後、江戸に下る。老年筆力毫も衰へざりきと云ふ。

此他、動物畫家にして、曾我派の遺流に、**曾我直庵・土岐洞文**あり。倶に鷹鶻の畫に長ず。

年表

時代	御字	在位年數	年號	執政者
東	後村上	30	興國 正平	足利尊氏 足利義詮
	長慶	4	建德 文中	足利義滿
	後龜山	20	天授 弘和 元中	
	後小松	30	應永	足利義持 足利義量 足利義持
時	後土御門	36	文正 應仁 文明 長享 延德 明應	足利義尚 足利義植
	後柏原	26	文龜 永正 大永	足利義澄 足利義植

稱光	16	正長	足利義敎
後花園	36	永享 嘉吉 文安 寶徳 享徳 康正 長禄 寛正	足利義勝 足利義政
後奈良	31	享禄 天文 弘治	足利義晴
正親町	29	永禄 元亀 天正	足利義輝 足利義榮 足利義昭 織田信長 豊臣秀吉
後陽成	16	文禄 慶長	豊臣秀頼

山……代　桃山時代

徳川氏文運の隆盛と繪畫の發達

第七章　江戸時代

（後陽成天皇慶長八年より明治天皇慶應三年に至る十六代二百六十五年間）

徳川氏、元和偃武以來、三百餘年、天下靜謐にして、庶民殷富、文運隆盛を極めしかば、藝術の發達は前古に比なく、前代を承けたる狩野派の外、新らたに起れる畫派として、浮世繪あり。寫生畫あり。土佐・住吉派の再興あり。南宗畫・西洋畫の傳來あり。或は濃艷なる者、淸疎なる者、或は裝飾的なるもの、寫實的なる者、各種各體、技巧を異にして競ひ起り、互に角逐せる

江戸時代の期別

有様は、正に百花爛漫たるの觀ありき。

以上諸派、其起點の、江戸・京都を中心としたるは、勿論なりと雖ども、また其他の地方なきにあらず、當時文化一般に普及して、美術の愛用四民に亙り、鑑賞の流行、地方に弘まりぬ。そもそも之れ德川氏封建の制度と、昌平の餘澤とに起因する所にして、かくの如きは、絶えて前代になき所なり。

當代、繪畫の大勢は、之を二期に別つを得べし。慶長より元祿頃に至るまでと、明和・安永頃より文化・文政頃に至るまでと、之れなり。前者は、狩野派全盛期にして、此派に探幽・常信・山樂・山雪あり。英一蝶あり。浮世繪に、菱川師宣あり。土佐派に光起あり。裝飾畫に光淋あり。初め、戰國の餘風を受け、尙武的氣風にみち、狩野派の如きは、概ね峭峻勁拔の趣致に富みしも、

元祿頃より明清畫盛に長崎に舶載し長崎奉行の下に畫目利の職を置く

師宣、光琳等は、元祿の驕奢を受けて、其畫風一變せり。後者は、京都に於ける文人畫と、寫生畫との蹶起にして、文人畫に大雅堂・蕪村等あり。寫生畫に、圓山應擧あり。蓋し狩野派の、探幽以後、法度格式に拘泥して、其畫の千遍一律、また新意を求むるなきに際し、逸雅疎淡なる文人畫と、精緻妍麗なる寫生畫の、時人の好尙を惹きしは、自然の數なり。

そも〳〵南宗畫は、承應以來、歸化禪僧、隱元・木弇・卽非等の戲墨に、其端を發し、ついで、淸人伊孚九の來朝と、舶載明淸畫とに刺戟せられて、勃興せるは、尙宋元漢畫の東山時代に於けるが如し。最初京都に起りて、江戸に及びぬ。又九州は、其流傳の門戸なるが故に、夙に流布せり。かくて、文化・文政・天保頃に及びては、內外の畫風渾和融合して、其發達の極に達し、江

戸に華山・抱一・文晁・豊國・北齋・江漢等あり。京・攝・九州に、呉春・景文・岸駒・應瑞・應震・素絢・狙仙・竹田・介石等あり。畫界の群芳、一時に亂發して妍を爭ひぬ。以下更に流派を分ちて、之を叙説せんとす。

第一節　狩野派

狩野派は、當代に入りて、德川幕府に徵されて、其繪所となりぬ。啻に繪所となりしのみならず、諸侯の畫を需むる者、總べて此派の畫家を招聘せしかば、之れより宗支門葉、いよいよ榮えて、畫壇の全權を掌握し、苟も畫を學ぶ者、一度びは、斯派の門戸を窺はざる者なきに至りぬ。

前代、永德の後に、子**光信**あり。光信の弟、**孝信**に三子あり。**守**

狩野永徳　明治二十四年歿年七十八

中橋狩野　鍛冶橋狩野

木挽町狩野　狩野探美守貴　明治二十六年歿年五十四

勝川雅信　明治十二年歿年五十七

濱町狩野　春川友信　大正元年歿年七十

駿河臺狩野　洞雲益信　元祿七年歿年七十

信・尙信・安信と云ふ。守信（探幽）別に一家を起しゝかば、二子尙信、父のあとをつぎ、三子安信は、又入りて伯父光信のあとを繼げり。之れより狩野家は、別れて數軒となりぬ。されば世俗に其屋敷地の名をとりて之れをよび、宗家なる安信の家を、**中橋狩野**と云ひ、守信の家を**鍛冶橋狩野**と云ひ、尙信の家を**木挽町狩野**と云ふ。中橋狩野は、光信より十一代、**晴雪永德**（永悳）を以て終り、鍛冶橋狩野は、十二代**探美守貴**を以て終り、木挽町狩野は、孝信以來十代**勝川雅信**を以て終れり。又尙信の子、常信の二子、**隨川岑信**、將軍家宣の命に因て、別に一家をなせるを**濱町狩野**と稱す。八代春川友信を以て終る。

以上四家の外、探幽門人**洞雲益信**の、探幽の養子となり、故ありて、後に別家を爲す者、之を**駿河臺狩野**と稱す。九代**洞春**

洞春秀信　明治十七年歿

京狩野
狩野山樂
狩野山雪
慶安四年歿
年六十三

秀信にして終る。

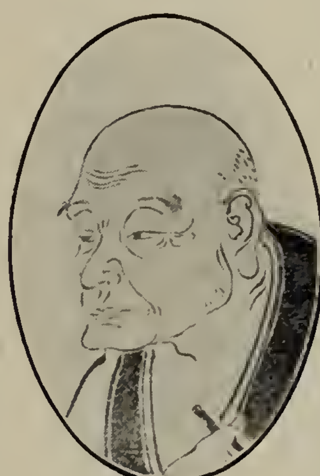
狩野家は、孝信の三子、悉く江戸に召されたれども、永德門人山樂の後のみ、依然京都に止まれり、之を京狩野と稱す。山樂義子、山雪名手たり。山雪子永納文藻を好み、鑒識に長じ、本朝畫史を著はす。

そも〳〵狩野派は、かくの如く宗族支家、繁榮して幕府の重用にあひ、閥閲高く標置して、所謂町繪師を睥睨し富貴權勢併せ得たりしが、中にも、木挽町狩野家は、六代榮川典信、七代養川惟信父子、特に將軍家治の寵を得て、其勢力、他の同族を凌ぎ、敎を乞ふ者、尤も多く、其門に麕集せり。されども、寵遇の厚きは、又他面に於て弊なきを得ず。富貴逸樂は、何日しか遊惰偸安と變じ、絶えて技術の進歩を企てず。されば、近古の

狩野探幽
延寶二年歿
年七十三

畫聖探幽の、一度起りてよりは、後また俊邁の士を出さず。晩年、木挽町狩野、晴川養信・勝川雅信等、折から開西畫壇の新風潮に激せられて、從來の祖先粉本嚴守の弊を破り、廣く古法を繹ねて、新意の發圖を企てしも、ついに、家學の衰微を挽回するに由なかりき。

狩野探幽　探幽、名は守信、探幽は其號、又白蓮子の號あり。狩野永德の孫、孝信の長子たるは、既に述ぶるが如し。慶長十七年、江戸に上りて將軍德川家康・秀忠に謁し、元和三年、幕府の繪所となる。後宮内卿法印に叙せらる。



狩野探幽肖像
桃田柳榮筆

父夭折せしかば、畫を狩野興意に學び、年わづかに二十五歳にして、二條城の障壁に畫く。爾來、縱横揮灑兀々とし

清原雪信

て已まず。老來意氣加はりて、筆力益、盛なり、されば其筆蹟頗る多し。探幽、和漢古今の名畫に於て殆んど究めざるなく、粉本蓄積山を爲す。かゝる基礎の上に、自家獨得の法を立てしかば、諸家の長所渾然として融合し、東山時代以降の漢畫はこゝに全然日本的に醇化して溫雅簡淨の探幽風を生ぜり。世に探幽をさして狩野家中興の祖と稱するは、良にゆゑあり。



倣古畫卷の一部(狩野探幽筆)
侯爵池田仲博氏藏
(本畫卷は流書きと稱す宗元畫人中より各
一圖を撰びて其筆意にならひて畫ける者
本圖元人錢舜擧の筆意)

探幽の姪女、清原雪信、探幽に學び、其法を得たり。識者、又

狩野常信
正徳三年歿
歳七十八
常信幼時庭竹の月にうつれるを見て其描法を悟る

久隅守景
探幽門下四天王
久隅守景
桃田柳榮
神足守周
鶴澤探山

英一蝶
享保九年歿
年七十三

女流畫家中興第一と爲す。

探幽歿後、狩野家の妙手として、只**狩野常信**あるのみ。常信は、木挽町狩野尙信の子なり。養朴と號し、法印に叙せらる。和歌を善くし、畫を伯父探幽に學び、其技探幽に讓らず。

探幽門下の俊才として、**久隅守景**あり。守景は、加賀の人なり。守景の畫を、探幽自己の筆と思ひ誤りしこと屢ありきと云ふ。

狩野門下の俊秀として、守景と當時雙絕と稱せらるゝを**英一蝶**とす。一蝶は、狩野永眞(安信)の門より出づ。



盆踊圖(英一蝶筆)侯爵池田仲博氏藏

一蝶の慣用畫題、座頭の喧嘩乘合船の雜談闇鼈の川狩丁稚の口論等

狩野興意　寛永十三年歿

松花堂　寛永十六年歿年五十六

宮本二天　正保二年歿年六十四

曾我蕭白　天明三年歿年五十四

蕭白應擧の畫を罵りて繪圖となす

専ら滑稽的趣味ある浮世繪を畫き、輕妙の筆墨、奇警の意匠共に人の意表に出づ。一蝶また俳諧を好み、文藻に秀づ。

狩野光信の門に**興意**あり。探幽の師にして名手たり。狩野山樂の門に**松花堂**あり。名は興乘、松花堂、又猩々翁と號す。山城、男山八幡、瀧本坊の僧なり。書に工にして、三藐院近衞信尹公、本阿彌光悅と共に、寛永三筆と稱せらる。又牧溪潑墨を學びて、尤も其旨趣を得。時人之を推重す。此墨戲に倣ふものを松花堂流と稱す。

兩刀の劍法を以て名高き**宮本二天**、また畫を善くす、海北友松の門人たり。

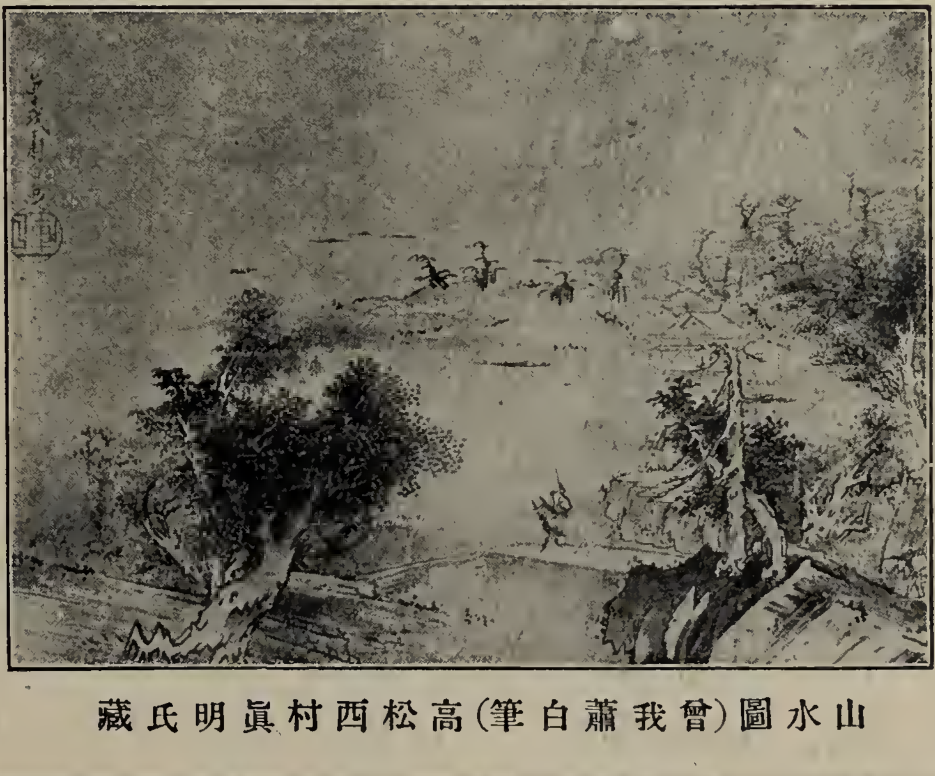
曾我蕭白　前代曾我氏の遺流に、曾我蕭白あり。自ら曾我蛇足の後裔と號し、京都に住して一家を成す。性頗る猜狂、其

畫また常に奇恠迷靈にして、變幻百出す。但し筆力の剛健なるは、常人の及ぶ所にあらず。

第二節　土佐派

土佐家は、光信の後、また振はず。前代に於て家系斷絕し、殆ど衰微を極めたりしが、其後、泉州境に於て、門人光吉と云へる者の孫に光起あり。光起、再び帝室の繪所に補せらるゝに及び、こゝに土佐家復興するを得たり。

土佐光起　光起、堺より出でゝ京都に移り、從五位下左近



山水圖（曾我蕭白筆）高松西村眞明氏藏

土佐光吉
慶長十八年歿年七十五
光元以來の繪所こゝに復舊す

土佐光起
元祿四年歿
歲七十五

光起宋李安忠の圖に倣ひて鶉圖を得意とす

土佐畫に印識落欵を署するは光起に始る

住吉如慶寛文十年歿年七十二

衞將監に任ぜられ、次いで法橋に敍せらる。光起の筆、溫雅敦厚にして氣品あり。當時、狩野探幽と並び稱せられて、名手たり。光長・光信・光起を土佐の三筆と稱す。但し光起の畫は、狩野派と、宋元の筆致風格とを加へしかば、所謂在來の土佐畫とは同じからず。子**光成**父に學びて又繪所預たり。



鶉圖（土佐光起筆）安藝長尾富太郎氏藏

光吉の男に、廣通あり。後西院天皇の叡旨によりて、住吉慶恩（鎌倉時代住吉の繪所）のあとをつけり。薙髪して法眼に敍せらる。之を**住吉如慶**と稱す。是に於て、久しく廢

滅せし住吉家、又再興せらる。子廣澄亦薙髪して具慶と稱す。德川綱吉に召されて、幕府の繪所となる。之れより江戸の土佐派を生ぜり。

住吉具慶
寛永二年歿
歳七十五

光起の畫、其家風を一變し、頗る土佐派の本領を失ひしかば、文政天保の頃、之れが非を論じて、復古說を唱ふる者出で來りぬ。田中訥言・宇喜多一蕙・岡田爲恭之れなり。

土佐派の復古

田中訥言　訥言は、名古屋の人にして、京都に住す、當時、土佐派の家格を失ひ、萎靡生氣なきを慨し、自ら春日光長・藤原信實等古土佐の筆蹟を究め、一家を成しぬ。有職故實に明かに、古代の衣冠殿閣を寫して其精を盡す。

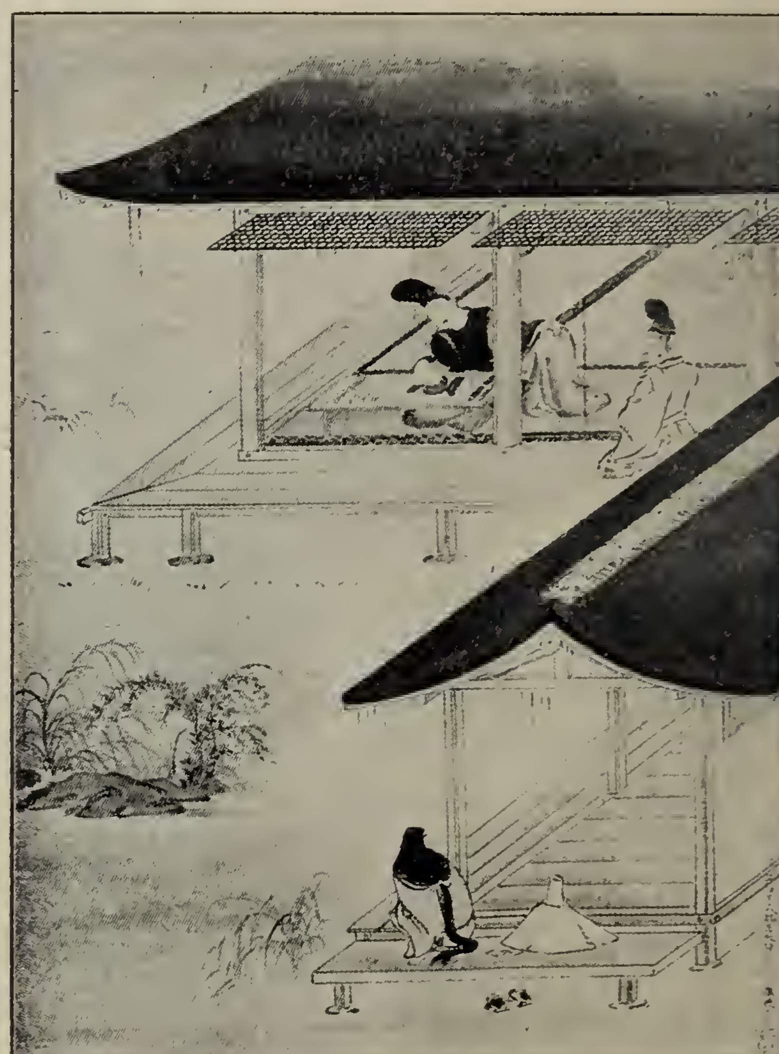
田中訥言
安政六年歿

宇喜多一蕙　一蕙は、京都の人なり。畫を訥言に學び、又藤原信實に法とり、有職故實を究む。一蕙、又書を善くし好んで

宇喜田一蕙
安政六年歿
年六十五

岡田爲恭
文久三年歿
歳四十三

本阿彌光悅
寛永十四年歿
歳八十二



今昔物語大江定基圖
岡田爲恭筆
帝室博物館藏

で和歌を詠ず。其勤王の事蹟は世の知る所なり。

岡田爲恭　爲恭は、元と狩野派に學びしも、好んで土佐派を研究し、光長・信實等の筆致を得、また法念上人行狀圖を模寫すること兩三回、行筆精緻、設色鮮麗、古土佐復興家中の第一能手たり。

第三節　裝飾畫派

寛永の頃、**本阿彌光悅**あり。畫を狩野永德に學び、又書に巧

本阿彌光悅は寛永三筆の一人なり
俵屋宗達 寛永頃
尾形光琳 享保元年歿年五十九

なり。書卷・紙箋の下繪より工夫して、一種洒脫の文樣的繪畫を作れり。光悅に次いで**宗達**あり。宗達、本姓は野村、俵屋と號す。金澤の人なり。法橋に叙せらる。師承詳ならざるも、狩野派、又土佐派を究め、又光悅に倣ひて、特殊の裝飾畫を創めたり。而して是等の畫風を大成したるを尾形光琳とす。



風雷神屛風繪の一部(尾形光琳筆)
野村宗達の畫を模寫したるもの
伯爵德川達孝氏藏

尾形光琳 光琳、名は方祝、雁金屋と號す。京都の吳服商なり。法橋に叙せらる。畫を狩野常信に學び、又古土佐の畫法を參酌し、專ら光悅・宗達の遺風を慕ひ、遂に之を大成して、一家の機軸

尾形乾山
寬保三年歿
歳八十一

酒井抱一
文政十一年
歿歳七十二

を作れり。而して其裝飾的畫風に於ては、實に古今に超絕し、意匠の縱橫他に匹儔を見ず。古人之を激賞して、其常を轉じて奇となすの技倆は天性に出で、强學の能く到る所にあらずと云へり。光琳の畫は、又尤も多く工藝界に應用せらる。所謂光琳式之れなり。弟に**乾山**あり。製陶を以て著はる。又畫を善くす。



秋草屛風繪の一部（酒井抱一筆
前圖の裏繪にして表面の金地な
るに對して本圖は銀地なり）

酒井抱一　光琳の衣鉢を襲ぎ、裝飾畫に掉尾の異彩を放てるを酒井抱一とす。抱一は、元と播州姬路城主酒井忠之の實弟なり。江戶根岸に隱

伊藤若冲
寛政十二年
歿歳八十五

棲して鶯村と號す。幼より畫を好み、沈南蘋の畫を學び、又狩野派・土佐派・浮世繪をも參酌し、其後光琳の畫風を慕ひ、隔世の弟子となりぬ。花卉に長じ、庭前常に草花を栽培して之を寫生し、以て研鑽せりと云ふ。賦彩妍麗にして韻致風尚の高き所其特色たり。

伊藤若冲　天明・寛政の頃、京都に伊藤若冲あり。若冲世々菜蔬を商ひ、若狹屋仲兵衞と稱す。仍て號とせり。初め、狩野派を學び又宋元の名蹟を模せしが、既にして徒らに前人の蹤蹟を歩趨することの無益なるを覺り、つひに寫生に志し專



(御物菊花小禽三十幅中の一部)
伊藤若冲筆

浮世繪初期の代表的作品に彦根屏風繪あり

ら花卉翎毛を畫きて、こゝに一新格をひらきぬ。蓋し一種の裝飾的描寫法にして、しかも光琳とは別調たり。其畢生の大作として、花卉大幅三十六幀あり。今御府の藏に歸す。

第四節　浮世繪派

前代の末より、自ら社會好尚の變遷して、繪畫界に、時俗圖の出現を見るに至りぬ。固より之れ土佐派、又は狩野派畫家の手すさびに出で、署名する者すらあらざりしが、岩佐勝以出づ



彦根屏風繪の一部(筆者未詳)
伯爵井伊忠直氏藏

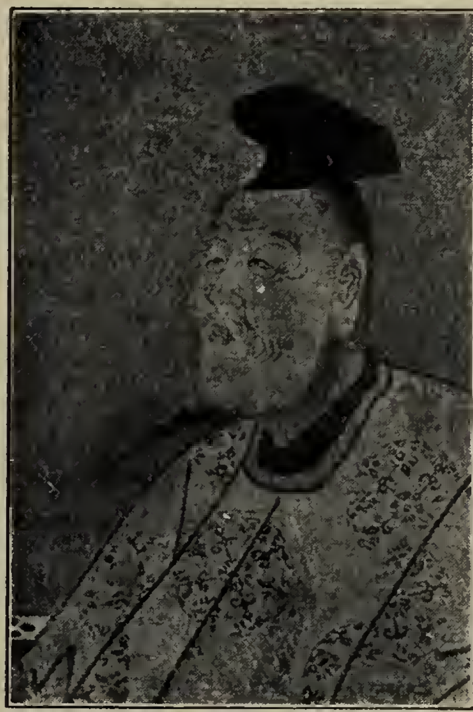
岩佐勝以
慶安三年歿
歳七十三

武藏國川越東照宮藏三十六歌仙扁額に勝以自筆の落款あり

菱川師宣
正德四年歿
歳七十七

るに及びて、浮世繪畫家を以て自ら標榜し、以て時樣の風俗を畫きぬ。之れそも〳〵浮世繪の濫觴なり。

岩佐勝以 岩佐勝以は、又岩佐又兵衞といひ、世俗に所謂浮世又兵衞のことなり。元、織田信長の臣、荒木村重の遺子にして、畫を土佐家に學び、越前福井に流寓せしが、寛永中、德川家光に徵されて、江戸に行けり。古來、又兵衞に關する誤傳多く、其作品又正鵠を得がたかりしが、輓近其家系と眞筆とを發見して、始めて多年の疑問氷解せり。



三十六歌仙柿本人麿
岩佐勝以筆
(勝以の人物畫は皆長頭の筆癖あり)
武藏川越東照宮藏

菱川師宣 又兵衞について起りしを、菱川師宣とす。師宣

錦繪の始に丹繪紅繪漆繪等あり

宮川長春 寶暦二年歿 歳七十一

は、安房の人なり。江戸に出でゝ縫箔を業とせしが、遂に畫家となる。其師受する所を知らざれども、只管、又兵衛の筆意をならひて、市井狹斜の風俗を畫き、自ら署名して日本繪史、又大和繪師と稱す。之に於てか、又兵衛に始まりし浮世繪は、師宣に及びて、いよ〳〵旗幟鮮明になりぬ。師宣、又繪本、竝に一枚繪の印行を工風し、肉筆の外に版畫を畫けり。此繪本は、後に江戸時代、平民文學の發達と共に、色々に變じて、小說本の挿繪となりぬ。又一枚繪は、後に二枚・三枚の續畫となり、又其着色法も、漸次進步して、數回摺合せの法案出せられ、遂に所謂江戸錦繪を完成するに至りぬ。されば、師宣は、又版畫の開祖たり。

　師宣以後、浮世繪畫家の輩出する者、續々たり。宮川長春・勝

勝川春章　寛政四年歿　歳六十七

鳥居清信　享保十四年歿　歳六十六

鳥居派の畫は蚯蚓描瓢簞足を以て特色とす

奥村政信　明和五年歿　歳七十九

鈴木春信　明和七年歿　歳五十三

北尾政演　文化十三年　歿歳五十六

多喜川歌麿　文化二年歿　歳五十三

歌川派祖

歌川豐春　文化十一年　歿歳八十

川春章・鳥居清信・奥村政信・鈴木春信等の名手あり。鳥居清信は、丹繪を工風し、又專ら、歌舞伎芝居の繪看板に、其特色を發揮し、奥村政信は漆繪・浮繪を創め、鈴木春信は「ふきぼかし」「から摺」の工夫者たり。かの名高き戯作家、磐瀬京傳、また其半生は浮世繪畫家として丹青を揮ひ、北尾政演と云へり。長春・春章の跡をつぎて出でたる浮世繪畫家に**喜多川歌麿**あり。尤も美人畫に長じ、其婉美纖麗當代及ぶ者なしと稱せらる。



美人圖（喜多川歌麿筆）
横濱原富太郎氏藏

浮世繪派中最も其畫系の永く、門流の多きを歌川派とす。祖歌川豐春、豐後より出でゝ江戸に來り、浮世繪を以て一家

歌川豐國
文政八年歿
歳五十七
豐國小說本の挿畫を畫くこと三百五十餘種畫を請ふ者門前市をなせりと云ふ

二世歌川豐國
元治元年歿
歳七十九
國貞尤も賦彩の工夫につとむ
田舍源氏繪は國貞の筆なり

をなす。門人豐國出づるに及びて、其名初て盛なり。

歌川豐國　豐國は一陽齋と號す、夙に豐春の門に學び、美人畫並に俳優の肖像畫に長じ、其畫ける歌舞伎俳優の錦繪は、都鄙爭うて之を求むるに至る。門人五渡亭國貞、また出藍の譽あり。入りて其後を繼ぎ**二世豐國**と稱す。



錦繪美人合十二月
兩國煙火の一部
歌川豐國筆

そも／＼豐國・國貞等の盛時は、恰も文化・文政の頃に際し、江戸時代文運の正に其極に達したる時期なりしかば、其描寫の妙は、印刷術の進步と相俟つて、一層錦繪の發達を促がしたり。曾ては數種の色彩を摺合はすに過ぎざりしが、豐國は二十餘囘を摺合はすに至

歌川重廣　安政五年歿　歳六十二

廣重東海道五十三次圖の外諸國百景圖江戸百景圖等を畫けり

葛飾北齋　嘉永二年歿　歳九十

北齋また北齋漫畫を著はし工藝界に裨益する所多し川宗理・畫狂老人・載斗・雷斗・雷震・辰齋・辰政等の雅號あり

り、國貞は、更に進んで、五十餘回を重さね、なかには金銀螺鈿を加へて、五彩絢爛、人目を驚かす者あり。之れより江戸繪、又吾妻錦繪の名、江湖内外に喧傳せらる。

歌川の門より出でゝ、別に風景畫を以て名をなせるを**歌川廣重**とす。廣重偶、事を以て、東海道を旅行しけるに思ひつきて、其寫生圖を錦繪に上ぼしゝが、頗る其着想の新らしきを以て、大に世人の喝采を博せり。

葛飾北齋　多方面の畫才を以て、浮世繪畫家中の一地歩を占むるを、葛飾北齋とす。北齋、初め勝川春章に學びしも、更に狩野・土佐又は支那・西洋畫等、各種



扇面美人圖
葛飾北齋筆
東京益田孝氏藏
By Hokusai

の長所を取りて、之を研究し、寫生を以て之を變化せり。されば、其造詣する所、頗る深く、人物・花鳥・山水等、物として畫かざるはなし。肉筆の外、又當時發行の小說本にして馬琴・種彥等、其他の作に係る者にして、北齊の挿畫に因らざるはなし。又北齊の名は、和蘭人を經て、夙に歐洲に知られ、西人の之を見る、猶日本畫の代表者たるかの觀を爲し、斷片零楮、尙千金を値せり、北齊、雅號屢〻變じ、十數囘を數ふ。北齊の號は、文化八九年以降用ふる所なりと云ふ。

浮世繪は、江戶の外、京・攝にもあり。京都には菱川師宣以前に**雛屋立圃**あり。正德の頃、浮世繪の聖手と呼ばれたる**西川祐信**あり。大阪には、**月岡雪鼎**あり。美人畫に長ず。

雛屋立圃　寬文九年歿　歲七十二
西川祐信　寶曆元年歿　歲八十一
月岡雪鼎　天明六年歿　歲七十七

支那畫の二派と南宗畫の傳來

文人畫

第五節　南宗畫派

支那畫に、南北二派あり。南宗派・北宗派と稱す。北宗畫は唐の思李訓を以て祖とし、南宗畫は同く王維を以て祖とす。もと、之れ後人の命名する處にして、筆者は、當初より此區別を樹てゝ畫きしにあらざりき。されども、其地理的關係よりして、自ら南北畫風の相違を生じ。北宗畫は蒼勁に、南宗畫は輕輭に、個々別樣の觀を呈するに至りぬ。爾來、支那歷代の間に於て、此兩派盛衰消長あり。北宗畫は何日しか衰へ、南宗畫獨り熾にして、元より明清に及びて、尤も其盛を極めたり。中にも清初に在つては、優遊風雅の思想一代を覆ひ、士大夫・文人にして、畫を作る者多く、南宗畫は一層詩文と相合して(所謂文人畫)當時の翰墨界を傾倒したり。而して此畫風は、享保中

伊孚九享保十一年始て日本に來り爾來二十餘年間往來す

彭城百川 寶曆三年歿 歲五十六

祇園南海 寶曆元年歿 歲七十六

柳里恭 寶曆八年歿 歲五十三・

池大雅 安永五年歿 歲五十四

大雅曾て指頭畫を能くす人の之を見て窮鄕僻邑筆に乏しき所の寶とすべしと云へるに慙ぢて之を止む

清人伊孚九に因て、始て我邦に傳はり來りぬ。之を足利時代能阿彌等に依て傳へられし古南畫に對して、明清南畫と稱す。

伊孚九、屢〻來朝して、頻りに其古淡蕭踈なる山水畫を作るや、其畫風は、いたく時人の心をうごかし、折から興隆せる支那文學の幇助によりて、此畫の發達をなせり。而して其最初に現はれたるを**彭城**(サカキ)**百川・祇園南海・柳里恭**等とす。しかも之を大成したるは大雅堂なり。

池大雅

大雅、姓は池、名は無名、大雅は其號なり。別に九霞山樵・三岳道人等の號あり。初め伊孚九の筆蹟を學び、又柳里恭・祇園南海に益を請ひ、以て文人畫の肇祖となる。大雅又書を善くす。其妻、玉瀾、また大雅に學び、頗る其技に長ぜり。大雅、

玉瀾　天明四年歿　歳七十八

謝蕪村　天明三年歿　歳六十八

蕪村其生地攝津毛馬村の蕪菁の產地なるを以て號とす

胸襟磊落、規矩に拘泥せず、一代を擧げて奇行多し、其畫の飄逸洒脱にして韻致の高き所、人の能く及ぶ所にあらず。



楓林停車圖（池大雅筆）
東京吉田丹次郎氏藏

謝蕪村　大雅と同時に京都に在て、倶に、文人畫開拓の功を負ふ者を謝蕪村とす。蕪村、性は與謝、名は長庚、蕪村は其號、又春星・



春溪歸漁圖
謝蕪村筆
近江村田利兵衞氏藏

野呂介石　文政十一年歿歲八十二
中林竹洞　嘉永六年歿歲七十八
山本梅逸　安政四年歿歲六十八

夜半亭等の別號あり。蕪村俳人として著名なるは、世既に定評あり。蕪村、初め畫を彭城百川に學び、又元明諸大家の遺墨を研究すと云へど、蕪村自らは、吾に師なし、古今の名畫を以て師となすと云へりしとぞ。蓋し師承の得たる所より、天才自然の造詣多きに居るならん。其山水は、大雅の疎逸と趣を異にし、明畫の精巧を奪へり。蓋し大雅と蕪村とは當代覇をなすの好適手なるべし。蕪村また減筆の草畫に長じ、一點一劃にして忽ち形象を具ふ。所謂俳畫なり。田能村竹田之を評して、用筆行墨、簡便巧黠、別に一體を開らくと云へり。

大雅・蕪村の呼號に因て起れる南宗畫は、爾來、年毎に新手の崛起を催がし、文政・天保の頃に及びては、斯派の驍勇雲の如くに輩出せり。**野呂介石・中林竹洞・山本梅逸・岡田半江・浦上**

岡田半江　弘化三年歿　歳六十五
浦上春琹　弘化三年歿　歳六十八
田能村竹田　天保六年歿　歳五十九
貫名海屋　文久三年歿　歳七十八
賴山陽　天保三年歿　歳五十三
長崎派
日高鐵翁　明治四年寂　歳八十一
三浦梧門　萬延元年歿　歳五十二
木下逸雲　慶應二年歿　歳六十七
釧雲泉　文化八年歿　歳五十三
高久靄崖　天保十二年歿　歳四十九
渡邊華山　天保十二年歿　歳四十九

春琹・田能村竹田・貫名海屋等之れなり。中にも竹洞の山水、梅逸の花卉、倶に精妙を極む。竹田は南豐文人畫の祖にして、詩文に長じ、其著山中人饒舌は、當代に於ける繪畫評論の白眉たり。賴山陽亦餘技として畫筆を試み、其作、耶馬溪圖卷は著名なり。此ほか、文政五年、清人江稼圃の長崎に來るや、其門に**日高鐵翁・三浦梧門・木下逸雲**等の所謂長崎派を出せり。

南宗畫は、長崎を門口として、流傳せしが故に、先づ關西に於て、大いに發達せしが、其關東に及ぼせしは、肥前の人、釧(クシロ)雲泉の功に歸す。雲泉に次で**高久靄崖・渡邊華山・椿椿山**等輩出し、以て關東南畫の一派をなせり。

渡邊華山　崋山名は登、崋山は其號、三河の人なり。幼にして令丁苦刻具に艱難を嘗む。始め儒學に志せしが、後變じて

椿椿山
安政元年歿
歳五十四
天保十二年十月十一日華山屠腹の前日魯生の圖を作る

谷文晁
天保十四年
歿歳七十八



黃梁一夢(魯生)圖
渡邊華山筆
橫濱原六郎氏藏
By Kwazan

畫を金子金陵に學ぶ。又谷文晁の教を受く。其歴史上の事蹟は、世の知る所なり。華山專ら明清畫蹟を研究し、淸王石谷の山水、惲南田の花鳥畫を喜び、又洋畫に私淑して、頗る肖像畫に長じ、當時、其作品に陰影を施せるものあり。山水・人物・花鳥、皆之を善くし縝密なるもの、疎淡なる者、水墨設色、一として可ならざるなく、畫相の變化、新意の流露、蓋し當代の偉觀たり。一代の傑作として、**千山萬水圖・千公高門圖・耕織圖・魯生圖**等あり。門人**椿椿山**其衣鉢をつぐ。

谷文晁　南北合派を標榜して、別に文化・文政頃の斯道界

文晁精力抜群古書畫堆裡に筆を揮ひ兀々としてやまず曾て戯に詠じて曰く
文晁の好きは月夜に米の飯つとめかゝさず何日も朝おき



樓閣山水圖
谷文晁筆
伯爵徳川達孝氏藏

By Bunchō

に盛名を馳せたるを、谷文晁とす。文晁は、江戸の人、寫山樓と號し法眼に叙せらる。夙に宋・元・明の名蹟をしたひ、又雪舟・探幽の筆意を悟り、是等を折衷して、一機軸を出せり。山水・花鳥・人物、皆精妙なれども、わけて山水と人物畫とに長ぜり。又青綠山水は、最も其得意とする所にして、結構の緊密、設色の古雅、殆んど明人と席を爭ふに似たり。文晁、田安家に仕へ、白河樂翁公に知られて、集古十種を畫き、石山緣起を補修し、又は日本名山圖繪等を著はす。皆世に行はる。

沈南蘋派

是より先き享保十六年、清人**沈南蘋**、長崎に來れり、南蘋、花鳥畫を善くし、勾花點葉體の畫風を傳へぬ。ついで、又天明中清人張秋穀來りて、常州派の花鳥畫を傳へたり。之に於てか、曩に來りし伊孚九の山水畫と共に南畫の全部入り來りぬ。而して常州派の花鳥畫は、主もに渡邊華山に因て繼紹せられたり。

南蘋の勾花點葉體花鳥畫は、妍麗秀澤にして、能く耳目を喜ばしめ、其滯留わづかに三年有餘にすぎざりしかど、我畫界に非常なる刺戟を與へたり。長崎



秋園猫兒圖
沈南蘋筆
男爵岩崎小彌太氏藏

熊代熊斐
安永元年歿
歳八十

宋紫石
安永九年歿
歳六十五

圓山應擧
寛政七年歿
歳六十三
應擧の名は其慕へる錢舜擧の名に出づと云ふ
應擧の名盛なるや上王公より下庶民に至るまで其畫を珍重し日に索め月に請ふて寸暇なし應擧之に應じて勉勵少しも倦まざりきと云ふ

の譯官**熊代熊斐**、まづ其門に入りて、父子之を學び、又熊斐の門より、宋紫石父子を出せり。之より南蘋風一世を風靡し、遂に寫生派の巨擘、圓山應擧を出すの動機を與へぬ。

第六節　寫生畫派

圓山應擧　大雅より稍遲れて、京都に寫生派の巨擘、圓山應擧出づ。應擧は丹波の人なり。名は主水、又應擧と改む。家世々農を以て業とす。應擧、幼より畫を好み、京都に出でゝ狩野派の畫家、石田幽汀の門に學び、又倭漢の古名蹟を模し、わけて錢舜擧・仇英・唐寅等の畫風を喜ぶ。又沈南蘋の寫生と、西洋畫とを研究し、遂に一格


圓山應擧映像
山口素絢筆
子爵岡澤精一氏藏



伊勢小津與右衛門氏藏

鯉魚圖雙幅の一(圓山應擧筆)

By Ōkyo.

(八四頁—八五頁ノ間ニ入ル)

應擧の作品として近江三井寺圓滿院七難七福圖瀑布圖但馬大乘寺襖繪讃岐金刀比羅神社襖繪等其他世上に夥だし
白井華陽應擧の畫を評して筆姿娬媚設色之精緻匠心之微妙擧類無遺と云へり

をひらく。所謂圓山派之れなり。之れより關西の畫壇、爲めに一變し、其流風餘韻、ひいて現代に及びたり。

應擧の畫は、寫生を以て主とす。田能村竹田、曾て之を評して意態性情一々眞に迫まりて窮盡せざるはなしと云へり。蓋し應擧は、古來の粉本模倣を以て屑とせず、自ら進んで、實物の眞と、其活躍生動の態を寫さんことを努めたり。されば、寫生に關する逸事として、臥猪、祇園社鷄圖の話など、世に傳へらる。

應擧の畫、能く花卉竹石の眞を穿ち、鯉魚・狗兒・鷄等、殆と生動するが如きの妙ありとは、嘖々人の稱する所。但し、山水圖は、温藉の一面に拘し、人物畫に至りては、氣品甚だ下れり。之れ頗る惜しむべき事とす。

應瑞
文政十二年
歿歳六十四
應受
文化十二年
歿歳三十九
應震
天保十一年
歿歳五十
僧月僊
文化六年寂
歳八十九
皆川淇園
文化四年歿
歳七十四
長澤蘆雪
寛政十一年
歿歳四十五

子**應瑞**・**應受**あり。應瑞の子に**應震**あり。いづれも、家風を紹ぐ。應擧の盛時に當てや、其門に遊ぶ者、千餘名を以て數ふと云ふ。就中、**長澤蘆雪**・**森徹山**・**山口素絢**・**駒井源琦**・**渡邊南岳**・**僧月僊**・**吳月溪**・**皆川淇園**等多士濟々として斯派の驍將たり。



動物畫卷の一部(長澤蘆雪筆)
廣島保田八十吉氏藏

長澤蘆雪　蘆雪は、山城・淀の人なり。人となり、磊落豪放にして、覇氣に富み、其神來の鬼才は、師家の繩墨に覊せられず。爲に其作品の往々常軌を逸せる所あるも、また穩健にして、壯跋の筆なきにあら

駒井源琦
寛政九年歿
歳五十一
山口素絢
文政元年歿
歳六十
渡邊南岳
文化十年歿
歳四十七
森徹山
天保十二年
歿歳六十七
森一鳳
明治四年歿
歳七十四
森狙仙
文政四年歿
歳七十五

ず。

駒井源琦　源琦は、京都の人なり。蘆雪と併せて、應擧門下の二哲と稱せらる。されども、兩者全然、性格を異にし、源琦は、着實老熟、唐美人畫に長ず。**山口素絢**、また京都の人、邦俗の美人畫を善くし、源琦と對稱せらる。**渡邊南岳**また京都の人にして、後、圓山派を江戸に傳へたり。**森徹山**は、森狙仙の義子にして、圓山派を大阪に擴ろむ。徹山の義子に**森一鳳**あり。


子母猿圖（狙仙筆）
子爵松平直德氏藏

森狙仙　狙仙は大阪の人(或は長崎の人と云ふ)にして、近古に於ける動物畫の大家なり。初め狩野派を學び、後、寫生を專らにし、常

狙仙柴野栗山の贈詩によりて其號を改む

四條派祖呉月溪 文化八年歿歳七十

に好んで猿を畫き、又狸を畫く、猿を畫くに、或は深山幽谷を跋渉し、或は自ら庭樹に之を飼ひ、以て親しく其活躍嬉戲の狀を研究せり。故に其描く所、姿態百出、變化の妙を極めざるなし。狙仙、初め祖仙と號す、後之を狙仙に改む。



山水圖(松村月溪筆)東京吉田丹左衛門氏藏

呉月溪　月溪、初め姓は松村、名は春、月溪は其號なりしが、後故ありて姓を呉、名を春と改め、呉春と稱す、京都の人なり。はじめ畫を蕪村に學び、後、應擧の畫格を喜びて、之に倣ふ。卽ち蕪村と應擧とを併せて一家を成す。其家、京都四條通

松村景文
弘化元年歿
歳六十五

岡本豐彦
弘化二年歿
歳六十八

柴田義董
文政二年歿
歳四十

にあるを以て、世人其畫風を稱して、四條派と云ふ。

月溪、行墨清潤、橫筆斜掃の沒骨描に、最も其特色を發揮し、又刷毛を用ふること多し。蓋し、京都の畫は應擧出でゝ一變し、月溪出づるに及びて、更に二變せり。然れども寫生派たるに於ては、其規一なり。月溪、常に門生を敎へて曰く、翰墨の技は、古を師として、古に泥まず。古來名家の長所を取つて、之を折衷し。以て別に一機軸を出すべしと。其意のある所を知るべし。門下又一代の俊髦多し。

松村景文は、月溪の弟なり。月溪の畫法を受けて、花卉に長じ、其淡彩精妍、兄に譲らず。

岡本豐彦、また月溪門下第一の俊才たり。山水に長じ、其技、遙かに景文の上に出づ。他に**柴田義董**あり。人物畫に長じ、**山**

山脇東暉 天保十年歿歳六十三

西山芳園 慶應三年歿歳六十四

岸派祖 岸駒 天保九年歿歳九十

岸岱 慶應元年歿歳八十四

連山 安政六年歿歳五十六

白井華陽

脇東暉あり。道釋畫に秀でたり。景文の門に**西山芳園**あり。大阪の人にして、また名手たり。

岸駒　圓山・四條派の、京・攝を風靡せる時に當りて、また寫生より出でゝ、別に一旗幟を樹て、應擧・月溪の諸家と、相角逐したるを岸駒とす。岸駒、姓は佐伯、名は駒と云ふ。加賀金澤の人なり。京都に出でゝ、有栖川宮家の臣となり、後朝廷に仕へ、從五位下越前守に任ぜらる。岸駒の畫は、其花卉翎毛の巧は、南蘋に出で、其他、宋人の法格に得る所多し。常に虎を得意として畫けり。但し、晩年、覇氣を使ひて筆墨を弄し、特に顫筆厭ふべき者あり。子**岸岱**家風を紹ぎ、弟子**連山**京都の人にして、四條派を畫く。畫乘要略の著者、白井華陽は、越後の人にして、また岸駒の門に出づ。

第七節　西洋畫

西洋畫は、前代の初めに於て、既に基督教と共に、本邦に傳來したりしかど、繪畫として之を學ぶものなかりき。爾來、基督教の國禁と共に、其模本をさへ失ひしが、寛永中、肥前天草殘黨の一人、山田右衞門作と云へるもの、西洋畫をよくするを以て、江戸に召されたりと云へど、其技一代に止りて、また他に傳はらず。將軍德川吉宗の、西洋學術の輸入を奬勵するや、百般の典籍と伴ひて、また西洋畫は流傳し來れり、其寫實的描法と、遠近法とは、忽ち在來の日本畫に影響し、崋山・應擧・北齊等の畫風に及び、殊に浮世繪は、西洋畫の刺戟に因て、工夫せられたること頗る多し。此時に當りて西洋畫家として、自ら油畫を畫きしを、司馬江漢とす。

我國現存最古の西洋畫は天正年中作と稱する各國帝王騎馬圖(松平子爵藏)支倉常長肖像(伊達伯藏)並に南部伯藏洋畫古屏風等なり

山田右衞門作

享保五年將軍吉宗洋書輸入の禁を解く

司馬江漢 文政元年歿 歳七十二

天明三年江漢始めて銅版を刻す

江漢の畫はつひに胡粉繪に變じ芝居書割

司馬江漢

江漢は江戸の人なり。初め狩野派を學び、又浮世繪を畫き、明畫をも模せしと云ふ。後、長崎に赴き、蘭人に就きて始めて西洋畫を學びたり。當時繪具其他畫材を得るの道なかりしかば、江漢一々自ら之を製するに苦心せり。されども、其畫、もとより未だ幼稚にして士人の翫賞を惹くに至らず、又之を受けて、大成すべきものもなかりき。



海上朝暾圖(司馬江漢筆)石田五六郎氏藏

江漢、又銅版畫を試みぬ。門人に、亞歐堂田善・安田雷州あり、銅版畫は、圖樣精緻、方寸の裡に、諸國名所圖等を印刷せしかば、人々之を奇とし、大に世にもてはやされ、忽ちにして三都

のぞき目鏡繪等に用ゐらるるに至る

文久元年川上冬崖蕃書調所の出役となる之れ西洋畫を調査する始なり

に傳播せり。

江漢の油繪は、遂に中興の功をなさずして、市井の間に沒し去りしが、其後幕末西洋學術技藝の修得を圖るの際、蕃書調所に於て、又西洋畫の研究に着手したり。

第八章　現代　（明治天皇明治元年より今上天皇に至る二代五十餘年間）

畫運の衰微と文人畫の流行

明治の維新は、非常なる變革なりき。爾後十數年間、舊來の事物、多くは破壊せられて、建設は未だ起らず。專ら、西歐物質的文明の輸入に汲々として、人のまた美術の何たるを談ずる者なし。狩野・住吉の諸家は、世祿を沒せられ、爾餘の畫家、また其生業を失ひ、流離困厄を極めたりしが、たゞ此際、前代末に於ける餘勢と、維新志士の好尚とに醞釀せられて、文人畫

安田老山　明治二十八年歿歳六十六
中西耕石　明治十七年歿歳七十八
奥原晴湖　大正二年歿歳七十六
平野五岳　明治二十六年寂歳八十三
田能村直入　明治四十年歿歳九十四
川上冬崖　明治十四年歿歳五十四

の流行を來たしゝは斯界に於ける一の變兆ならん。

當時、文人畫家として、東京に**安田老山**、京都に、**中西耕石**あり。共に盛名嘖々たり。老山は、美濃の人、畫を日高鐵翁に學び、又支那に航して、研鑽年あり。歸來東京に住す。不羈豪邁にして人に下らず。耕石は、日根對山の門なり。筆力勁跋にして、覇氣に滿つ。又清人、鄭板橋に私淑し、福田半香の門より出でたる女流畫家に**奥原晴湖**あり。

豊後に、**平野五岳**あり。眞宗の僧なり。又古竹と號す。田能村竹田の門に學び、詩・書・畫三絕を以て名あり。竹田の義子**直入**また父の衣鉢を襲ぎて、畫名京阪間に高かりき。

西洋畫は、幕末に設けられし蕃書取調所(後の開成所)出役に、川上冬崖あり。蘭書につきて畫技を教授したりしが、是よ

東京美術學校設立
第一回帝室技藝員
橋本雅邦
幸野梅嶺
森寛齋
野口幽谷
田崎草雲
狩野永悳
瀧和亭
狩野派
狩野芳崖
明治二十一年歿歲六十一

進會を開設せり。かくて維新以來、跋扈を極めし文人畫は、頓に閉息して、形をひそめぬ。

ついで、明治二十一年政府は、東京美術學校を設立し、專ら日本畫の教育に勉め、同二十三年、宮内省に於て、帝室技藝員を置かせられ、以て其優遇の途を開かせたまへり。

この前後に於ける日本畫家各派の重なる者を擧ぐれば、狩野派に**狩野芳崖・橋本雅邦・狩野永悳・狩野守貴**等あり。


狩野芳崖肖像

狩野芳崖　芳崖は、長門豐浦の人、狩野勝川雅信に學び、橋本雅邦と共に木挽町繪所門生中の俊髦たり。夙に狩野派の法格に拘束せらるゝをいさぎよしとせず。屢〻鋒鋩を現はして、師の怒に觸れしと云ふ。維新後

窮乏辛慘を極めたりしが、後年、其名始て顯はる。實に東京美術學校の創立者たり。名高き慈母觀音圖は、畢生の大作にして、稿を改むること再度、其端麗壯嚴の筆、現代佛敎畫としてまた他に匹儔を見ず。

橋本雅邦は、武藏、川越藩の人、江戸に生る、芳崖歿後、東京美術學校敎授として、畫運の復興に勉む、尤も水墨山水に長じ、一代の耆宿たり。現代大家にして、其門に出づる者多し。

狩野派にあらざるも、もと狩野派に學び、後、諸法を參酌して、一家をなせるを**菊地容齋**とす。容齋、名は武保、江戸の人、好んで忠臣孝子の圖を畫く、故實を質して、服飾器玩を明かにす。曾て前賢故實を著はし、孝明天皇より、日本畫師の稱を賜はる。其寫生的描寫法は、在來の人物畫法を一變す。容齋、又文

橋本雅邦 明治四十一年歿歲七十四

菊地容齋 明治十一年歿歲九十一



悲母觀音圖(狩野芳崖筆)(東京美術學校藏)

(九八頁―九九頁ノ間ニ入ル)

河鍋狂齋　明治二十五年歿　歲五十九

土佐・住吉派

山名貫義　明治三十五年歿　歲六十七

守住貫魚　明治二十五年歿　歲八十五

川邊御楯　明治三十八年歿　歲六十九

光琳派

中野其明　明治二十五年歿　歲五十九

雲谷派

杉谷雪樵　明治二十八年歿　歲六十九

浮世繪派

月岡芳年　明治二十五年歿　歲五十四

水野年方　明治四十一年歿　歲四十三

筆に、長じ其隨筆・詩集共に世に行はる。

狩野派より出でゝ、歌川國芳の門に學び、常に、飄逸簡狂の筆を揮ふを**河鍋狂齋**とす。好んで厲鬼幽靈、其他滑稽畫を畫く。

土佐・住吉派に**山名貫義**(住吉弘貫門)**守住貫魚**(同上)**川邊御楯**(土佐光文門)等あり。山名貫義は、東京美術學校教授にして、帝室技藝員たり。光琳遺派に**中野其明**あり。雲谷派に**杉谷雪樵**あり。浮世繪派には近代の大家**月岡芳年**あり。芳年、大蘇、又一魁齋と號す。初め歌川國芳の門に學び。後菊地容齋の前賢故實を喜び、又葛飾北齋を慕ひ、遂に獨得の一生面をひらき、浮世繪の描法を一變す。所謂芳年風として、一時大に世に行はる。門人甚多く、**水野年方・稻野年恒**等尤も顯はる。維新後、雜

稻野年恒　明治四十年歿歲五十
南宗畫派
野口幽谷　明治三十一年歿歲六十八
瀧和亭　明治三十四年歿歲七十二
田崎草雲　明治三十一年歿歲八十四
佐竹永海　明治七年歿歲七十二
寫生畫派
柴田是眞　明治二十五年歿歲八十五
川端玉章　大正二年歿歲七十二
野村文擧　明治四十四年歿歲五十八
荒木寛畝　大正四年歿歲八十五
幸梅嶺森　明治二十八年歿五十二

誌新聞の挿畫家の多くは其門下たり。

南宗畫派には、**野口幽谷・瀧和亭・田崎草雲**(文晁門)**佐竹永海**(同上)等あり。野口幽谷・瀧和亭は、共に椿椿山の門に出で、老山・晴湖一派の疎勁なるに似ず、頗る渾厚精緻なる南宗畫なり。幽谷・草雲共に帝室技藝員たり。

寫生派には、東京に、**柴田是眞・川端玉章・野村文擧・荒木寛畝**・京都に**森寛齋・幸野梅嶺・今尾景年・久保田米僊・鈴木百年・岸竹堂・熊谷直彥・望月玉泉**等あり。是眞は蒔繪師にして畫家を兼ね、淸新洒脫の筆を以て名あり。川端玉章・荒木寛畝は、東京美術學校敎授にして、又共に帝室技藝員たり。幸野梅嶺・岸竹堂は、關西畫壇の重鎭にして、共に帝室技藝員たり。中にも京都に於ける現代大家にして、梅嶺門下に出づる者多し。

西洋畫の振興
黑田清輝
森寬齋 明治二十七年歿歳八十一
今尾景年
久保田米僊 明治三十五年歿歳五十五
鈴木百年 明治二十四年歿歳六十八
岸竹堂 明治三十年歿歳七十二
熊谷直彦 大正二年歿歳八十六
望月玉泉 大正二年歿歳八十
文部省美術展覽會開設

一時沈滯せし西洋畫は、明治二十九年、東京美術學校に西洋畫科を增設せられて、再び振興の氣運に向ひぬ。當時**黑田清輝**、佛蘭西より歸り來りて、敎授の職に在り。專ら佛蘭西新派の油繪を傳ふ。之れより公私の人にして、西洋畫研究の爲に海外に留學する者尠からず。

日本畫の、流派的拘束を破り、自由研究を以て新意を試みたるは、既に芳崖其端を開けり。爾來年と倶に此傾向盛にして、或は西洋畫の手法を參酌し、或は奈良・平安時代の古法に則り、又西洋畫家にして東洋的趣味を加ふるなど樣々に工夫する者多し。

政府は、既に美術學校を建設して、まづ之れが敎育につとめ、又內國勸業博覽會をひらき、美術部を設けて、屢、之れが奬

勵を試みたりしが更に明治四十年を以て第一回文部省美術展覽會を開催し、爾後年々の定例とせり。かくて敎育と競技とは、車の雙輪の如く竝び行はれて、繪畫の隆盛を來せる、蓋し今日の如きはあらず。

年表

時代	御字	在位年數	年號	執政者
江	後陽成	9	慶長	1、徳川家康
	後水尾	18	元和 寛永	2、徳川秀忠
	明正	14		3、徳川家光
	後光明	11	正保 慶安 承應	
	後西院	8	明暦 萬治 寛文	4、徳川家綱
時	光格	37	天明 寛政 享和 文化	11、徳川家齊
	仁孝	30	文政 天保 弘化	12、徳川家慶

戸					
靈元	東山	中御門	櫻町	桃園	後桃園
23	24	26	12	15	17
延寶 天和 貞享	元祿 寶永	正德 享保	元文 寛保 延享	寛延 寶曆	明和 安永
5、德川綱吉	6、德川家宣 7、德川家繼	8、德川吉宗		9、德川家重	10、德川家治

代	現代
孝明	明治 今上
20	46
嘉永 安政 萬延 文久 元治 慶應	明治 大正
13、德川家定 14、德川家茂 15、德川慶喜	

日本美術史教科書 終

校毅授

日本畫派概覽

凡例

一、甲乙畫家間の朱線は兩者の血族關係を示し黑線は其畫系を示す

一、古來の畫派中巨勢土佐の如きは其血族畫系共に詳ならざる節多し本表其明らかなる者二三をのみ揭ぐ

一、谷文晁を南宗畫家中に菊地容齋を狩野派中に編入せるが如きは只便宜に從ふのみ

一、本表右側の數字は大正六年より百年づゝ遡算したる年代なり

